

「内務省引継地図」における印と地図史料の収集・整理

千葉 真由美

目次

はじめに

一 「内務省引継地図」の内容

1 「内務省引継地図」について

2 「内務省引継地図」の「江戸図」

3 「内務省引継地図」の「合戦図」

*付表「城図」「村絵図」

二 「内務省引継地図」における印

1 「内務省引継地図」における印

2 「内務省引継地図」に関わった機関

三 「内務省引継地図」からみた地図史料の収集・整理

1 修史事業における地図史料の収集・整理

①旧番号について

②内務省地理局地誌課における地図の分類

③史料採訪について

2 海軍文庫の印と地図史料の収集・整理

3 帝国大学附属図書館の印と地図史料の整理

おわりに

はじめに

史料編纂所には「内務省引継地図」と総称されてきた、二千点弱の地図群が伝来してきた。「内務省引継地図」は、史料編纂所に連なる諸機関によって収集・保存されてきた地図群であり、その内容は多岐にわたる。この「内務省引継地図」の中には、それぞれの地図に印が押されるか、あるいは印影模写されているものが多数ある。これらの印はそれぞれの地図の伝来を探るための手がかりとなっている。本稿はこの多数の印を手がかりとして、「内務省引継地図」がいかなる整理段階を経て伝来してきたかについて考察したものである。

これまで、「印」を具体的に取り上げた研究は少ない。先行研究としては、文庫や個人が使用した「蔵書印」を取り上げ、その印影を収集、掲載したものなどがあげられよう⁽¹⁾。これらの研究によって多くの蔵書印の使用者を判断することが可能となっている。本稿でもこれらの研究の成果をもとに「内務省引継地図」における印について、本文中に掲載した一覧表を作成した。

蔵書印は、近世になると広く使用されるようになるが、同時に村落レベルでも、個々の農民によって証文などに押される印が普及する。しかし、特にそのような印については研究が進んでいるとは言いがたい。未だ印自体

の形態変化などを見るにとどまり、印の検討が歴史研究において一定の問題を持つものとして具体的に取り上げられてはいないのである。印の使用を具体的に読みとること、印を「押す」という行為に、それを行う主体の意思を示すものとして、より深い意味を見いだしていくことが可能である。

以上のような問題意識を持ちながら、本稿は「内務省引継地図」における印を取り上げ、地図の伝来・収集・整理をさぐるための手がかりとしたものである。

本稿ではまず第一章において「内務省引継地図」として総称されてきた地図群の第一群について、地図の内容を大きく分類した中から「江戸図」と「合戦図」を取り上げた。またそれらの地図における蔵書印から、その使用者とされる人物の地図収集について紹介した。第二章では、「内務省引継地図」の第一群にみえる印のほとんどを紹介し、それらの印をもとに、近代以降「内務省引継地図」に関わった機関を年代順に参照できるようにした。第三章では印およびその他の手がかりをもとにして、「内務省引継地図」がいかなる整理段階を経てきたかについて考察した。

なお、この「内務省引継地図」はその整理にあたり、松本良太氏が基礎カードを作成し、杉本史子氏が整理作業の全体を引き継いで、海原亮氏と千葉が再整理を行ったものであり、現在公開に供している。再整理の中では、地図それぞれの伝来について特に注意し、多数の印の存在を重視してデータベース化を行った。²⁾

また、この「内務省引継地図」の内容概括とデータベースでの公開については、既に杉本史子氏が紹介されているので参照していただきたい。³⁾

一 「内務省引継地図」の内容

1 「内務省引継地図」について

史料編纂所所蔵「内務省引継地図」は大きく第一群と第二群とに分けられる。第一群は主に近世から近代にかけて作成または模写された地図を中心とした九八二点（請求番号0001～0559⁴⁾）の地図群であり、第二群は明治期に陸地測量部やそれに連なる機関によって作成された九八一点（請求番号0560～1295）の地図群である。

伝来についていえば、第一群は非常に多岐にわたっていることが指摘できるが、一方、第二群はすべて「海軍文庫」に連なる機関で収集、整理された地図群であることが特徴といつてよい。第二群については具体的に第三章で述べる。

第一群には、地図それぞれの伝来を知るための手がかりがいくつかある。まず、現在の請求番号以外の番号が付けられていることである。この番号を以下「旧番号」とする。それぞれの地図の表紙や裏面に貼付されたラベルに記載されている番号である。また、同じく表紙や裏面に貼付された長方形の紙片に「○○之部」と記載されているもの（例、「総国之部」「東海之部」）、「武蔵」「相模」「東京」など旧国名あるいはそれに類する記載のあるもの、「○○探訪」と記載されているもの（例、「山城探訪」「陸中探訪」）もある。そして本稿で順次述べるように、地図の旧蔵者を示す印は特に伝来を知るために重要な手がかりとなっている。

以上のような、地図の伝来を知る手がかりについては第二章および第三章において詳しく紹介する。

ところで「内務省引継地図」の第一群は伝来と同様に、内容も非常に多岐にわたっている。

ここでは第一群を内容によって大まかに分類した中から、「江戸図」「合

戦図」を具体的に取り上げ、「内務省引継地図」の中でどのような意味をもった地図として存在しているのか、その記載内容などについても若干、紹介してみたい。

2 「内務省引継地図」の「江戸図」

「内務省引継地図」の中には二点の「江戸図」が存在する。これらの地図は「江戸図」としてはいずれも一般によく知られたものばかりであり、各地に写などが所蔵されている。

「内務省引継地図」には「長禄江戸図」「慶長江戸図」「明暦江戸図」「寛文五枚図」が存在する。これを一覽表にしたものが表1である。

表1は「江戸図」を研究史にしたがい、「分類」欄において区分した。「地図名称」欄には地図の名称を、「年代」欄には地図に記載されている年代をすべて掲載した。「作成者」欄も同様に地図に記載されている作成者を、「伝来」欄にはそれぞれの地図の伝来に関わる記述について掲載し、「印文」欄では地図にみえる印文を掲載したものである。「印番号」欄の番号はそれぞれの「印文」に対応するものであり、第二章の表3で一覽表としている。また「請求番号」欄は現在の請求番号である。なお、二点の地図に便宜上aからkまでの記号を付した。

以下、全二点の「江戸図」について、内容を概観し、また印をもとに地図収集という点について触れてみたい。

①長禄江戸図

長禄江戸図にあたるのが表1の、aおよびbとした地図である。描かれているのはどちらも「長禄江戸図」であるが、地図に記載された名称は異なっている。表1に掲載した「江戸起立図」(以下a図)は東京府蔵本によるものであり、次の「江戸古図」(以下b図)は大田南畝の手写本の模

写であるなど、そもその伝来も異なっている。

図中の記載から、a図は明治一九年七月に東京府の蔵本を松平次郎が模写し、加藤熊吉が校合したものであることがわかる。特に加藤熊吉の記載箇所には「加藤」の印文を持つ朱印が押されている。これは実際に押された印である。また、背表紙には「地割方役所」との記載がある。

一方、b図は表紙に「大田覃手写本模写」と記載されている。「大田覃」とは大田南畝(一七四九〜一八二三)のことで、江戸時代中期の幕臣として、また文人、学者としてもよく知られている。表紙にみえる「覃」は名であり、四方赤良、蜀山人など多くの号を使用していた。b図は、蔵書家としても知られている大田南畝の手写本の模写とされているが、『南畝文庫蔵書目』にある、「七 江戸古絵図」中の「長禄写」を模写したものと考えられよう。但し、b図には南畝の蔵書印はみえない。

大田南畝の収集した他の地図類についても『南畝文庫蔵書目』に掲載されているのでその概要を知ることができる。国立国会図書館蔵『南畝文庫蔵書目』は南畝の弟子の山崎美成が手写し、南畝自ら訂正追加を書き加えた目録といわれる。この『南畝文庫蔵書目』に掲載された地図は「巻二」の「地理」の内にあり、一〇〇点余になる。うち「写」とあるものは六〇点余で、半数以上は模写によって収集されたものであることがわかる。これらの地図は九項目に分けて分類されており、大田南畝の分類方法を考える上でも興味深い。

まず、「二」に分類されている地図群は京都、大坂あるいはその近傍に関する地図を収集したものであり、「二」は国絵図に類するもの、「三」は江戸各地の地図を、「五」は寺社参詣に関わる地図を集めたものである。「四」「六」に分類されている地図はさまざまなものが一括されている。ここで取り上げた、江戸に関わる地図については「三」の他、「七」の「江戸古絵図 十種」、「八」の「寛文江戸絵図」および「延宝方角安見」な

(表1)「江戸図」一覧表

分類	地図名称	年代	作成者	伝来	印文	印番号	請求番号
長禄江戸図	a 江戸起立図 (表紙題箋)	長禄元. 4. 8/文化7. 5. 5再校/ 明治19. 7 東京蔵本	地割方役所 /松平次郎 写/加藤熊 吉校	明治19年7月以東京 府蔵本	(図中)「加藤」	708	0279
	b 江戸古図 太田 覃手写本模写 (表紙)			(表紙)「太田覃手写 本模写」			0297
慶長江戸図	c 慶長江戸内郭 図(表紙題箋)	明治13. 4写 (原本は慶 長12~15)	東京府記録 掛	明治13. 4に華族松浦 家蔵本を写す(「慶長 江戸図」、明治14. 7 に井伊家蔵本と付校、 悉皆同じ、神尾政嗣所 蔵本との異同を朱書、 また元和図との校合 もやっている。	(図中)「東京府図書 記」	601	0009
	d 慶長江戸絵図 (表紙題箋)	慶長/明治 23. 6写		小田原医師 山谷 所持/弘化2年 下 総国松戸宿薬商 山 下友右衛門 所蔵/ 大槻修二蔵本	(図中)「小宮山氏収 蔵図書」	507	0277
明暦江戸図	e 新添江戸図(内 題/表紙題箋)	明暦3. 1	板本 江戸 日本橋二丁 目 太郎右 衛門		(図中)「長井十足蔵 印」「長井之印」	505	0083
	f 明暦江戸絵図 (表紙題箋)/ 新添江戸之図 (内題)	明暦3. 1	板本 江戸 日本橋二丁 目 太郎右 衛門/渡邊 交齋 写		(図中)「修史館図書 印」/(図中)「西成文 庫」/その他1	204・ 826・ 825	0350
寛文五枚図	g 寛文十年江戸 図 中央 五 枚之内(表紙題 箋)	寛文10.12	遠近道印/ 日本橋南式 町目 経師 屋加兵衛	(表紙題箋)「東京府 引継」	(図中)「東京府図書 記」/(図中)「舊幕引 継書」/(絵図裏)「御 普請方沿革調」	601・ 829・ 830	0382
	h 寛文十一年江戸 図 浅草蔵前 本所辺東方 五 枚之内(表紙題 箋)	寛文11. 4	遠近道印/ 日本橋南式 町目 経師 屋加兵衛	(表紙題箋)「東京府 引継」	(図中)「東京府図書 記」/(図中)「舊幕引 継書」/(絵図裏)「御 普請方沿革調」	601・ 829・ 830	0381
	i 寛文十一年江戸 図 小石川御門 外本郷下谷谷中 辺北方五枚之内 (表紙題箋)	寛文11.11	遠近道印/ 日本橋南式 町目 経師 屋加兵衛	(表紙題箋)「東京府 引継」	(図中)「東京府図書 記」/(図中)「舊幕引 継書」/(絵図裏)「御 普請方沿革調」	601・ 829・ 830	0385
	j 寛文十二年江戸 図 牛込御門外 高田雑司ヶ谷辺 西方 五枚之内 (表紙題箋)	寛文12. 6	遠近道印/ 日本橋南式 町目 経師 屋加兵衛	(表紙題箋)「東京府 引継」	(図中)「東京府図書 記」/(図中)「舊幕引 継書」/(絵図裏)「御 普請方沿革調」	601・ 829・ 830	0383
	k 寛文十三年江戸 図 芝金杉 麻布南方 五 枚之内(表紙題 箋)	寛文13. 2	遠近道印/ 日本橋南式 町目 経師 屋加兵衛	(表紙題箋)「東京府 引継」	(図中)「東京府図書 記」/(図中)「舊幕引 継書」/(絵図裏)「御 普請方沿革調」	601・ 829・ 830	0384

* ()内は地図におけるそれぞれの記載箇所を示す。*地図中の記載によるものは「」で示した。

*「印文」欄で「その他」と一括したものについても、「印番号」欄ではそれぞれの印に付した番号を記載している。

ど、その収集を集中的におこなっているようにみえる。特に、「七」の「江戸古絵図 十種」については、「長禄写」以下「慶長附録一冊写」「寛永」から「明暦」「古代江戸図」まで、さまざまな年代の江戸図を収集している。

さて「内務省引継地図」の「長禄江戸図」であるが、a図、b図の二点の地図に記載されているものには、相違点がいくつか指摘できる。なお、東京都立中央図書館などにも所蔵されている、「長禄江戸図」とも異同が生じているなど各地の模写はそれぞれ異同が存在するようだが、本稿では「内務省引継地図」の二点のみについて紹介しておくことにすると、例えば、

a 図「三河嶋」 — b 図「三河嶋村」

a 図「箕輪高屋」 — b 図「箕輪守屋」

a 図「千速村」 — b 図「千束村」

などの文字記載において若干の異同がある。また、b図の方は方角記載がなく、a図には池や川の名称が記載されているがb図にはそれらが記載されていないなど、文字記載がa図に比べ少ない。また、寺社の絵についても、b図の方が単純な記載であるという印象を受ける。a図が江戸城の城壁を黒色に塗っているのに対し、b図は塗っていないなどの違いもある。

②慶長江戸図

同様に慶長江戸図についても見てみると、表1に示したように「内務省引継地図」の「慶長江戸図」は、「慶長江戸内郭図」(以下c図)と「慶長江戸絵図」(以下d図)が存在する。c図はいわゆる「慶長江戸図」にあたるもので「東京府図書記」の印および「東京府記録掛」の記載がある。

c図は、実際に測量したとみられる現存最古の江戸中心部の図とされるものである。⑨。図中に校合を行っている旨の記載が確認できる。この記載箇所

にある「東京府記録掛」の下に「小宮山」の印文を持つ朱印がみえるがこれについては後ほど第二章で取り上げる。d図は研究史上、「別本慶長江戸図」とされているもので、小宮山楓軒の蔵書印とされる「小宮山氏收藏圖書」の印影が模写されている。(写真1)

小宮山楓軒(一七六四—一八四〇)は江戸後期の水戸藩の農政家として知られる人物である。緯昌秀、号として「楓軒」を使用した。十五歳の時、立原翠軒に学び、天明三年(一七八三)に父昌徳東湖が没した後、家督を相続して、彰考館に入った。天明六年(一七八六)に立原翠軒が総裁となるとこれを補佐し、「大日本史」の編纂につとめ、寛政一年(一七九九)に郡奉行に抜擢され、数々の勸農殖産政策を行い、農村の復興などにも尽力した人物である。自身が膨大な編著を残していると共に古文書などの収集にもつとめている。師立原翠軒が没するとその著書の多くが楓軒のもとに渡ったとされている。¹⁰⁾師立原翠軒が没するとその著書の多くが楓軒

「別本慶長江戸図」は、江戸図としては最古の時代を示すものと位置づけられている。これは東京都立中央図書館に所蔵されている地図と同形態のものであり、他各地に写が存在する。¹¹⁾但し、東京都立中央図書館蔵の地図と比較すると、記載内容の異なる箇所がいくつかある。それは、例えば江戸城の堀付近の箇所で「申の年新規に道頂く」とある記載について、d図では別に「頂く力」と焼損部分にあたる箇所に朱書きで記載し、考証を



写真1
「小宮山氏收藏圖書」
(3.1×2.3cm)

行っているなどである。

さて、小宮山氏の所蔵地図についても、その蔵書目録などを見てみよう。蔵書家としても知られる小宮山楓軒とその孫南梁の編著書は現在数多く残されているが、その中でも国会図書館には「小宮氏叢書」と称される旧蔵書コレクションが納められている。「小宮山叢書」については、『帝国図書館書名目録』第三編に細目が掲載されている。「小宮山叢書」は楓軒の孫で南梁の弟でもある小宮山天香から明治四二年(一九〇九)に、六五点六〇八冊七枚を譲渡されたものである。七枚が地図であり、その内容は、「常陸図」「水戸図」「水戸古図 小田本」「水戸古図 川方本」「水戸領図」「紅葉陣屋図」となっている。ほとんどが水戸城下に関わる内容のものである。そして「慶長江戸図」については「小宮山叢書」の『養花庵棟著』の中に「慶長江戸図略説」なるものがみえ、この中に「慶長江戸図」を縮写したものが綴じられている。同時に地図の考証が多く記載されている。

「旧本焚損シテ頼ノ二邊ヲ去リシハ頗ル惜シムヘシト雖トモ、幸ニ其全形ヲ考フルニ害ナシ、此図ノ成ル年曆的知スヘカラヘト雖モ、申ノ年トアルハ慶長ナルヘク尾張ノ称ハ中将忠吉ナレハ、五年十月以後ナルヘク、里見□□丸ハ八年十月家督シタレハ、八年以後ナルヘク、内桜田及ヒ丸内ノ城垣ノ未タ建タサルハ十一年以前ナルヘキヲ悟ルヘシ、其他ハ毎條ニ付テ注明スヘシ」とあり、また巻末には、

「明治十五年第一月一日 草此以代試筆 南梁老人昌玄(印)」の記載がある。

なお小宮山楓軒・南梁の蔵書とその目録整備については、茨城県立図書館蔵『楓軒蔵書目』が参考となる。ここには地図を含め、多くの蔵書とその金額まで記載されている。

③ 明暦江戸図

明暦の大火(明暦三年一月二八日)以前の江戸の姿を伝える地図であり、また、北が上で例外的な構図となっている点が特徴的ともされている地図である。描かれている江戸城には天守閣(第三次建造)がみえるのだが、明暦の大火の後、実際は天守閣は再建されなかったといわれ、地図の日付は、明暦三年正月とされているが、この地図が前年に刷られたものであることから、天守閣は描かれたままであるとされる。

「内務省引継地図」の二枚の「明暦江戸図」のうち、e図は無彩であり、f図が彩色のものであることがまず目に付く。どちらも「板本 江戸日本橋二丁目 太郎右衛門」の記載があるが、f図は「渡邊交齋写」とある。また、表1に示したように、二枚の地図には全く別の印もみえる。

④ 寛文五枚図

明暦の大火で焼け野原となった江戸の復興のために、幕府は北条氏長(安房守)に命じて実測図を作らせた。完成後、氏長は江戸城の部分空白にした上で許可を得て民間に刊行させた。これが刊行江戸図の祖といわれる遠近道印編集、寛文一〇(一七三三)～一三(一七三八)発行の寛文五枚図である。同様の地図として、遠近道印編集、元禄三年(一六九〇)刊行の道中図「東海道分間絵図」などがあり、これは慶安四年(一六五二)幕命により氏長らが作った実測図をもとにしたものである。

「内務省引継地図」には五枚図のすべてが存在しており、表1ではgからkとして掲載した。遠近道印の花押および経師屋加兵衛の印も見える。なお経師屋加兵衛の印は手書きである。この五枚図は一括して伝来したものである。五枚共「旧幕引継書」「御普請方沿革調」の印がみられる。

以上、「長録江戸図」「慶長江戸図」の例からは、近世の蔵書家と呼ばれ

る者たちが、書籍と同様に地図も収集していたこと、その内容はそれぞれの『蔵書目』などによって明らかにするが、大田南畝などは地図を内容毎に分類していたことがわかる。また、南畝は「慶長江戸図」や「寛文五枚図」も収集していた。次に紹介する彰考館文庫の『彰考館蔵書目録』にも数種の「江戸図」が掲載されている。¹⁶⁾

3 「内務省引継地図」の「合戦図」

次に「内務省引継地図」のうち比較的多く収集されているものとして「合戦図」を取り上げてみたい。合戦図のうち五七点を一覧表にしたものが次の表2である。合戦に関わるものとして、陣立などを記載した図も含めて分類したものである。表2は「合戦図」を合戦毎に区分し、年代順に整理したものである。古く元弘の乱（一三三二―一三三三）について描かれたものから、明治の長州征伐（一八六四）、鳥羽伏見の戦い（一八六八）までのものを掲載した。

表2に掲載した項目については以下の通りである。

- ・「合戦名（年代）」欄において地図に該当すると思われる合戦名とその年代を地図の記載をもとに示した。但し、地図に具体的な年代の記載のないものについては、おおよその年代を示した。（例、大坂の陣など）
- ・「地図名称（標準名）」欄は地図に記載されている名称をもとに示した。また（ ）内はその名称が記載されている箇所を示しているが、地図に名称がないものについては（仮題）としている。
- ・「地図名称（その他）」欄は「地図名称（標準名）」以外の名称が地図に記載されている場合、その名称を示したものである。
- ・「作成者」欄は地図の作成に関わった人物について、地図の記載をもとに示した。
- ・「伝来」欄は地図に記載されているものうち、地図の伝来に関わるもの

のについて示した。

- ・「印文」欄において地図にみえる印の印文を示した。
- ・「印番号」欄はすべて番号によって表示してあるものだが、これは第二章で示す、表3に対応する印番号である。よって「印文」欄に対応している。
- ・「請求番号」欄では、地図の請求番号を示した。

以上の「合戦図」のうち、近世の「蔵書印」としてよく知られている彰考館の蔵書印を有する地図が二点存在するので紹介しておきたい。「長久手小牧山合戦図」（02882）と「関原合戦図」（03115）である。彰考館の蔵書印として知られている「彰考館」の印文を持つ瓢箪型の蔵書印が模写されているものである。（写真2）

水戸彰考館の蔵書は、徳川家康没後、尾張家に三千点、紀州家に三千点、水戸家へは二千点分譲された「御譲り本」を根幹としている。その後、明暦三年（一六五七）、徳川光圀の「大日本史」編纂事業のため、江戸駒込の別邸に編纂所を開き、全国的に史料採訪をしていく中で、文庫の図書が充実していった。寛文十二年（一六七二）には編纂所を小石川にあった本邸に移し、彰考館と名付け、書物奉行を置き、本格的に編修をはじめに至り、文政十二年（一八二九）に水戸へ移動したものである。



写真2
「彰考館」
(5.3×3.3cm)

(表2)「合戦図」一覧表

合戦名(年代)	地図名称(標準名)	地図名称(その他)	年代	作成者	伝来	印文	印番号	請求番号
元弘の乱(1331)	笠置山之城元弘戦全図并ニ四方手配堅固図(内題)	笠置山元弘戦図(表紙題箋)	応永14.5.16画/康暦2.8.2再画		「納当寺宝庫者也」	(絵図裏)「東京帝国大学図書印」d	417	0362
山崎合戦(1333)	山崎合戦図(内題)	山崎合戦之図(表紙題箋)	元弘3.3.15/明治20.11写	澤渡廣孝校	「明治二十年十一月京都建仁寺蔵本ヲ写ス澤渡廣孝校」	(図中)「文科大学史誌編纂掛」	402	0286
四條繩手合戦(1349)	河州四條繩手合戦補正行打死之図(内題)	四條繩手合戦之図(表紙題箋)	南朝 正平4年 京 貞和5.1.5/明治20.11写	澤渡廣孝校	京都建仁寺 蔵本	(図中)「文科大学史誌編纂掛」/(図中)「澤渡」	402・714	0317
桶狭間合戦(1560)	桶狭合戦(絵図裏題箋)	桶狭合戦図(仮題)/義元合戦(図中)	江戸期写					0135
川中島合戦(1561)	於信州川中嶋信玄与謙信合戦之図(内題)	河中嶋合戦(絵図裏題箋)	永禄4.9.10/江戸期写					0186
川中島合戦(1561)	永禄四年八月川中島合戦図 縮写(包紙/封筒表題)		永禄4.8			(包紙題箋)「館」	205	0296
川中島合戦(1561)	川中島合戦図 犬甘本(表紙題箋)	川中嶋信玄謙信合戦之図(絵図裏)	永禄4.9.10合戦					0330
川中島合戦(1553~1564)	信濃川中島合戦図(仮題)	河中嶋合戦(絵図裏)	江戸期写					0106
川中島合戦(1553~1564)	信州河中嶋合戦図(内題)	信州河中嶋合戦之図(表紙題箋)	明治20.11写	澤渡廣孝校	京都建仁寺 蔵本	(図中)「文科大学史誌編纂掛」/(図中)「澤渡」	402・714	0321
武蔵瀧山城攻(1569)	武蔵瀧山城攻之図(仮題)	武田北条瀧山小田原合戦(絵図裏)	永禄12/江戸期写					0107
姉川合戦(1570)	近江姉川合戦図(仮題)	姉川合戦(絵図裏題箋)	元亀元.6/永禄13.6.28/江戸期写					0114
三方原合戦(1572)	遠江三方原合戦図(仮題)	味方ヶ原カ(絵図裏題箋)	元亀3.12/江戸期写					0178
長篠合戦(1575)	長篠合戦(絵図裏題箋)		江戸期写					0180
備中高松城攻(1582)	備中国加夜郡高松城水攻図(内題)	高松城水攻図(表紙題箋)				(図中)「修史館図書印」/(絵図裏)「東京帝国大学図書印」c	204・416	0273

賤ヶ岳合戦(1583)	近江梁ヶ原陣立図(仮題)	志津高梁ヶ瀬(絵図裏)	天正11.4、江戸写					0109
賤ヶ岳合戦(1583)	近江志津嶽合戦図(仮題)	志津ヶ ^(等) 獄(絵図裏)	天正11.4.20~21/江戸期写					0110
賤ヶ岳合戦(1583)	近江志津嶽合戦図(仮題)	志津嵩(絵図裏)	天正11.4/江戸期写					0111
賤ヶ岳合戦(1583)	近江志津嶽合戦図(仮題)	志津嵩(絵図裏)	天正11.4/江戸期写					0184
賤ヶ岳合戦(1583)	四月廿一日江州北郡志津嶽柴田合戦之図(内題)	近江志津嶽合戦図(仮題)/志津嵩(絵図裏)	天正11.4.21/江戸期写					0185
小牧長久手合戦(1584)	尾州小牧陣(絵図裏題箋)	尾張小牧陣図(仮題)	天正12.4/江戸期写					0151
小牧長久手合戦(1584)	尾州長久手合戦備立(絵図裏題箋)	尾州長久手合戦備立図(仮題)	天正12/江戸期写					0177
小牧長久手合戦(1584)	長久手小牧山合戦図(内題)	天正十二年長久手小牧山合戦図一幀(表紙題箋)	天正12/明治15.10.25校	八等掌記名倉信敦校		(表紙)「館」/ (図中)「修史館圖書印」/ (絵図裏)「東京帝国大学圖書印」c (図中)「彰考館」/ (図中)「名倉」部分「名」	204・205・416・508・709	0282
信濃上田合戦(1585)	信州上田合戦之図(表紙題箋)	すへの信州上田合戦図(内題)	天正13.8.2/明治20.11写	澤渡廣孝校	京都建仁寺蔵本	(図中)「文科大学史誌編纂掛」/ (図中)「澤渡」	402・714	0322
豊後戸次川合戦(1586)	豊後国戸次川合戦図(仮題)	豊後陣ヶ(絵図裏題箋)	天正14.12/江戸期写					0164
鉢形城攻(1590)	武蔵鉢形城攻之図(仮題)	鉢形城(絵図裏題箋)	天正18.5/江戸期写					0134
伊勢津城攻(1600)	伊勢津城攻之図(仮題)	勢州津(絵図裏)	慶長5.8.23/江戸期写					0154
伊勢津城攻(1600)	慶長五年八月廿三日勢州津ノ城攻之覚(絵図裏)	伊勢津城攻之図(仮題)/廿番入(絵図裏題箋)	慶長5.8.23/江戸期写					0155
関ヶ原合戦(1600)	関ヶ原一戦之図(内題)	美濃関原合戦図(仮題)	江戸期写					0108
関ヶ原合戦(1600)	美濃関原合戦図(仮題)	関原合戦(絵図裏題箋)	慶長5.9/江戸期写					0115

関ヶ原合戦(1600)	美濃関原合戦図(仮題)	濃州関ヶ原(絵図裏)	慶長 5.9.15/江戸期写						0175
関ヶ原合戦(1600)	関ヶ原御陣絵図(表紙題箋)					(図中)「文科 大学史誌編纂 掛」	402		0215
関ヶ原合戦(1600)	関原合戦図 (表紙題箋/ 絵図裏)		慶長 5/ 明治 22. 11 写		水戸彰考 館本	(絵図裏)「文 科大学史誌編 纂掛」/(図 中)「彰考館」 /(図中)「村 山」/その他1	402・508・712・820		0315
浅井繩手合戦 (1600)	加州浅井繩手 合戦図(表紙 題箋/絵図裏 題箋)	加州浅井繩 手 慶長五 年(図中題 箋)	慶長 5/ 明治 22. 11写	重野校	石川縣本	(絵図裏)「文 科大学史誌編 纂掛」/(絵図 裏)「重野」/ その他 1	402・713・821		0316
信濃上田合戦 (1614)	信濃上田城攻 之図(仮題)	上田図(絵 図裏題箋)	慶長 19. 10/江戸 期写						0105
大坂の陣 (1614)	大坂冬の陣陣 立図(仮題)	大坂古図 (袋題)/冬 陣図(絵図 裏題箋)	慶長19			(絵図裏題箋) 「編輯掛」	811		0211 ③ (全4)
大坂の陣 (1614)	大坂冬御陣之 図(絵図裏)					(絵図裏)「文 科大学史誌編 纂掛」	402		0227
大坂の陣 (1614)	大坂冬陣図 上原本(表紙 題箋)			松平次 郎 写 /加藤 熊吉 校	上原方儀 蔵本 監 谷時敏ヨ リ借写	(図中)加藤熊 吉部分に「加 藤」	708		0276
大坂の陣 (1615)	元和元年大坂 夏陣之図(表 紙題箋)	大坂城図 四(袋題)/ 元和夏陣 (絵図裏)	元和元			(図中)「編輯 掛之印」	810		0223 ② (全4)
大坂の陣 (1615)	大坂夏陣絵図 (表紙題箋)	御陣ノ図 (内題)/大 坂夏御陣絵 図(絵図裏 /大坂夏御 陣絵図 一 枚(図中附 箋)	元和元. 5						0226
大坂の陣 (1615)	大坂夏軍図 (表紙題箋)		元和元. 5/寛政 11.9		東都桂林 舎蔵	(絵図裏)「東 京帝国大学図 書印」d	417		0229
大坂の陣 (1615)	大坂夏軍図 (表紙題箋)	元和元卯年 五月 御陣 之図(図中)	元和元. 5			(絵図裏)「東 京帝国大学図 書印」d	417		0230
大坂の陣 (1619)	大坂夏陣図 (仮題)	大坂陣(絵 図裏題箋)	元和 5.5 /江戸期 写						0094
大坂の陣 (1614~ 1615)	慶長元和冬夏 大坂陣營ノ図 (表紙題箋)	大坂城図 四(袋題)/ 元和慶長19 /元和元 大坂冬夏御 陣(絵図裏)	慶長19/ 元和元			(図中)「編輯 掛之印」	810		0223 ① (全4)

大坂の陣 (1614~1615)	慶長十九大坂冬陣之図(表紙題箋)	大坂城図四(袋題)／元和冬陣(絵図裏)	慶長19／元和			(図中)「編輯掛之印」	810	0223-③(全4)
大坂の陣 (1614~1615)	大坂御陣之図二枚之内(図裏)〈右図〉	大坂御陣之図二枚(袋題)				(袋)「文科大学史誌編纂掛」	402	0228-①(全2)
大坂の陣 (1614~1615)	大坂御陣之図二枚之内(図裏)〈左図〉	大坂御陣之図二枚(袋題)				(袋)「文科大学史誌編纂掛」	402	0228-②(全2)
大坂の陣 (1614~1615)	大坂城攻之絵図(内題)	大坂城攻図伊木本(表紙題箋)			兵庫縣但馬国養父郡寺谷村伊木貞太郎所蔵			0341
大坂の陣 (1614~1615)	大坂合戦図(表紙題箋)	大坂合戦図一幀(内題題箋)	明治19.9編修.採訪/明治20影写了	星野恒採訪	丹波国松井郡西田村小早川彦六蔵本	(図中)「帝国大学臨時編年史編纂掛」／(図中)「規道」／その他1	401・711・823	0342
天草の乱 (1637)	肥前国高来郡原城之図(内題)	肥前国高来郡原城之図全(表紙題箋)	寛永14.10.25蜂起/寛永15.2.27落城/明治18.6写	御用掛浮田可成写/四等掌記瀧澤規道校	華族有馬道純蔵書	(図中)「修史局」／(絵図裏)「東京帝国大学図書印」d／(図中、作成者名部分)「可成」／(図中、作成者名部分)「規道」	202・417・710・711	0361
天草の乱 (1637)	原之城陣取図(内題)	原之城陣取図有馬家一幀(表紙題箋)	明治18.4写	御用掛浮田可成写	子爵有馬道純蔵	(図中)「修史館図書印」	204	0376
天草の乱 (1637)	天草城攻之図(内題)	天草城攻之図一幀(表紙題箋)	明治17.6.10写/明治17.10.8校	三級写生字松林織之助写/八等掌記名倉信敦校	華族徳川昭武蔵	(図中)「修史館図書印」／(表紙)「館」／(図中作成者記載部分)「名」	204・205・709	0378
天草の乱 (1637)	原之城総陣取図(内題)	原之城総陣取図一幀(表紙題箋)	明治18.4写	御用掛浮田可成写	子爵有馬道純蔵	(図中)「修史館図書印」	204	0379
天草の乱 (1637)	原之城総陣取図(内題)	原之城総陣取図一幀(表紙題箋)	明治18.4写	御用掛浮田可成写	子爵有馬道純蔵	(図中)「修史館図書印」／(表紙)「館」	204・205	0380
長州征伐 (1864)	長州征伐絵図(絵図裏付箋/袋)							0159-②(全2)
鳥羽伏見の戦い (1868)	慶応四年伏見近傍戦争図(表紙題箋/内題題箋)		慶応4					0216

* ()内は地図におけるそれぞれの記載箇所を示す。*地図中の記載によるものは「 」で示した。
*「印文」欄で「その他」と一括したのものについても、「印番号」欄ではそれぞれの印に付した番号を記載している。

このような経緯から、彰考館の蔵書の内容は史書に特色があるといえる。また弘化三年(一八四六)には小山田与清が彼の擁書楼文庫の蔵書二万余巻を寄贈している¹⁷⁾。

このうち、彰考館の収集した地図についてはその蔵書目録によって知ることができる。蔵書目録は近世以降諸種の写本が伝わったが、大正七年に彰考館文庫員に手によって活版本が刊行された。その後、戦禍によって彰考館蔵書の約八割が焼失したが、それらの蔵書も含めたものが『彰考館圖書目録』¹⁸⁾(以下、『目録』)である。ここでは蔵書は各項目に分けて収載しているが、地図類については次のような凡例がある。

「一凡諸図各々類を以て従ふ、即位大饗及諸輿服の如き、之を職官に収む、州郡山水、城郭戦陣、之を雑書に収む、因て別に部を立てず」

地図類については書籍に合わせてそれぞれを附図として分けたのであって、地図として独立した分類はしていないというものである。

「内務省引継地図」の二点の地図は『目録』中の「巻之四丑部 諸史軍記類 甲越織豊時代」のうちに分類されている。どちらも「写」とされており、「内務省引継地図」の二点はこれを模写し、収集したものであることがわかる。

二点の地図の内容に触れてみよう。

「長久手小牧山合戦図」は彰考館で現蔵されているものである。地図には明治二二年一月に写した旨の記載がある。これに対して「関原合戦図」は、『目録』によると、焼失関東大震災(一九二三年)において焼失したうちのひとつであるが、具体的な年代の記載はない。

「長久手小牧山合戦図」には「此図雖間有齟齬不遑加私意暫随旧云爾 天明」との記載がある。また図中には長久手小牧山合戦に関わる付近の地名が記載され、道は朱線で記載されている。城の図なども記載されているが、それぞれの箇所において合戦に関わる文章記載がある。これに対し、

「関原合戦図」は「長久手小牧山合戦図」と同様に、「慶長五年 濃州関ヶ原岐阜合渡合戦之地理此図雖間有齟齬不遑加私意暫随旧云爾」とあるほか、この「関原合戦図」には特に文章記載が多い。それらは主に合戦に関する説明書きである。例えば、

「慶長五年子九月十五日辰ノ刻ニ合戦初リ未ノ刻ニ上方ノ諸軍陣敗北ス、東照君十四日亥ノ刻ニ岡山御着陣、夜寅ノ刻ニ岡山ヲ御出馬アリテ野上ノ西ノ南桃配ト云所御馬ヲ立ラル、此時雨少シ降ル」(傍点、筆者)

などの記載であり、また大垣城の箇所には
「大垣ノ城ニハ本丸ニ福原右馬介、備中ノ丸ニ熊谷内蔵介・垣見和泉守・木村宋左衛門・同伝蔵、三ノ丸ニ相良左兵衛佐・高橋右近大夫・秋月長門守七千人守城ス」(傍点、筆者)

などであり、地図それぞれの箇所において合戦の詳細が記載されているものである。

なお、彰考館蔵書としては、総裁であった立原翠軒が彰考館に蔵書を献納しているものもある¹⁹⁾。このうちの「祇園精舎図」が「内務省引継地図」に存在することに触れておきたい。

立原翠軒(一七四三〜一八一三)は、此君堂と号していたが、これを印文として使用したのが長方朱印「此君堂藏本」の印文を持つ蔵書印である。翠軒は宝暦一三年(一七六三)、二〇歳で彰考館に入り、天明六年(一七八六)、翠軒が四三歳のとき、総裁に抜擢されている。後、「大日本史」の編纂に関して弟子の藤田幽谷、高橋廣備らと対立したため、不本意な引退することになった人物である。

「内務省引継地図」のうち立原翠軒の蔵書印が捺されているものは「祇園精舎図」(0331)であり、「安永元年 藤原忠寄」の奥書のある図である。この地図右下に「此君堂藏本」の印影を模写したものが貼付されて

いる。(写真3)。この「祇園精舎図」については、「目録」中にもその記載がある。分類としては「巻之廿七 戊部 佛書 古文書類 附古図」のうちであり、「珍本」とされている写図である。『目録』にはこれらの書目が翠軒からの献納であることは記載されていないが、この「祇園精舎図」は立原翠軒が寛政八年(一七九六)三月に彰考館に献納したもののうちのひとつである。彰考館への献納については国会図書館蔵『見聞書目』²⁰⁾の中に、彰考館への献納書目としてすべてが掲載されている。この中で絵図は一五点、内容としては城図、合戦図、宅地図などがある。翠軒はこれらの地図を彰考館へ献納したが、地図には彰考館の蔵書印はおされなかったものと考えられる。²²⁾

以上、「内務省引継地図」を内容毎に分類し、そのうち「江戸図」「合戦図」について紹介した。地図の旧蔵者についてはその地図収集の一端を紹介した。本文中で触れたように、各地に写本がある地図もあり、地図を検討する際には、それらとの校合も必要であろう。

本稿では具体的に検討していないが、「城図」「村絵図」なども多く収集されているので、一覧表のみであるが以下に示した。掲載した内容は表2「合戦図」一覧表に準じているが、「城図」「村絵図」共、地域ごとにまとめたものである。それぞれの表ではすべての地図を掲載したものではなく、主なものを取り上げている。「内務省引継地図」が含む内容の一端や



写真3
「此君堂蔵本」
(5.0×2.0cm)

次章以降に述べる印の問題とも合わせて参照していただきたい。

二 「内務省引継地図」における印

1 「内務省引継地図」における印

先述したように「内務省引継地図」の各地図には、地図中や地図裏、表紙または袋などに印が押されていたり、印を模写したものが多くみえる。前章では「内務省引継地図」の内容と同時に、いくつかの蔵書印についても触れた。

そこで「内務省引継地図」における印の印文から所蔵機関や個人を比定し、作成したのが、次の表3「内務省引継地図」(第一群)所蔵印一覧である。表3は「内務省引継地図」(第一群)にみえるほとんどの印を掲載している。なお、第二群にみえる印については、第三章において改めて掲載している。表3には、近世の蔵書印や、近代以降の修史事業に関わった機関の印、その中で採訪や模写などに携わった人々の印も含んでいるため、「近世の蔵書印」「近代以降の印」「個人の印」などで区分してある。「個人の印」としたものの中には、現代我々が日常用いている印に近い形態を持つものもある。²³⁾印の中には適合させるべき区分が判然としないもの、あるいは印文が不鮮明で解読できない場合もあり、この場合はすべて「その他」の欄に掲載した。なお、蔵書印を収載した先学の研究は先に紹介したが、²⁴⁾「内務省引継地図」中の印にはこれらに掲載されていないものがあり、印を使用した人物や機関が特定できないものもある。

表3に掲載した項目については以下の通りである。

・「印番号」欄においてそれぞれの印に付した番号を掲載した。

この番号は、ある機関の成立年代などに沿って付したものである。次の表4で掲載した番号にも対応させている。この番号はデータベースの番号と一致するものである。なお、表3-1はおおよその年代順としたも

付表1 「城図」一覧表

国名	絵図名称(標準名)	絵図名称(その他)	年代	作成者名	印文	印番号	請求番号
渡島国	松前町図面(表紙題箋)		寛政10.7.6控 / 明治36.3借写		(図中)「文科大学史誌編纂掛」	403	0271
陸前国	奥州仙台御城下(表紙題箋)				(図中・表紙)「宮城縣地誌編輯係印」	604	0189
出羽国	出羽秋田城図(仮題)	出羽秋田(絵図裏)	江戸期写				0153
羽前国	米沢古絵図并定書(表紙題箋)	米澤旧絵図(絵図裏)	慶長7.11.13		(表紙裏)「三上教授在職二十五年祝賀記念奨学資金購入図書之記」/ (表紙裏)「東京帝国大学図書印」	729・418	0060
出羽国	出羽山形城図(仮題)	羽州山形(絵図裏)	江戸期写				0138
磐城国	奥州信夫郡福島城之図(表紙題箋)	諸州城壘図 拾六鋪(袋題)	板倉内膳正勝長代 / 明治16.10写	森信家 (図中) 「明治十六年十月野村直信氏ヨリ借用写ス森信家」	(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0025-⑫ (全14)
岩代国	岩代会津城図(仮題)	會津城(内題)/奥州会津(絵図裏)	江戸期写				0102
常陸国	常陸国土浦城之図(絵図裏題箋)		江戸期写				0136
常陸国	新沼郡水守故城(内題)	常陸十五城 図十五葉 并那珂川源図 一葉・久慈川源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)/常陸十五城図 十五葉・那珂川源図 一葉・久慈川源図 一葉・利根沿岸略図 一綴	江戸期カ	国史編纂方			0202-① (全19)
常陸国	那賀郡山方村高館古城(内題)	常陸十五城 図十五葉 并那珂川源図 一葉・久慈川源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)/常陸十五城図 十五葉・那珂川源図 一葉・久慈川源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)	江戸期カ	国史編纂方			0202-② (全19)
常陸国	那珂郡山方村亀城(内題)	常陸十五城 図十五葉 并那珂川源図 一葉・久慈川源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)/常陸十五城図 十五葉・那珂川源図 一葉・久慈川源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)	江戸期カ	国史編纂方			0202-③ (全19)
常陸国	茨城郡小川村故城(内題)	常陸十五城 図十五葉并那珂川源図 一葉・久慈川源図 一葉・利根沿岸略図	江戸期カ	国史編纂方			0202-⑤ (全19)

		一綴(袋題)／常陸十五城図 十五葉・那珂川源図 老葉・ 久慈川源図 老葉・利根沿 岸略図 老綴(袋題)				
常陸国	久慈郡大子故城 (内題)	常陸十五城 図十五葉 并 那珂川源図 一葉・久慈川 源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)／常陸十五城 図 十五葉・那珂川源図 老葉・久慈川源図 老葉・利 根沿岸略図 老綴	江戸期 <small>カ</small>	国史編纂 方		0202 -⑥ (全19)
常陸国	多賀郡龍虎山城 (内題)	常陸十五城 図十五葉并那 珂川源図 一葉・久慈川源 図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)／常陸十五城図 十五葉・那珂川源図 老 葉・久慈川源図 老葉・利根 沿岸略図 老綴(袋題)	江戸期 <small>カ</small>	国史編纂 方		0202 -⑦ (全19)
常陸国	常陸筑波郡小田故 城図(内題)	常陸十五城 図十五葉 并 那珂川源図 一葉・久慈川 源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)／常陸十五城 図 十五葉・那珂川源図 老葉・久慈川源図 老葉・利 根沿岸略図 老綴(袋題)	江戸期 <small>カ</small>	国史編纂 方		0202 -⑧ (全19)
常陸国	行方郡玉造村古城 (内題)	常陸十五城 図十五葉 并 那珂川源図 一葉・久慈川 源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)／常陸十五城 図 十五葉・那珂川源図 老葉・久慈川源図 老葉・利 根沿岸略図 老綴(袋題)	江戸期 <small>カ</small>	国史編纂 方		0202 -⑨ (全19)
常陸国	行方郡麻生古城 (内題)	常陸十五城 図十五葉 并 那珂川源図 一葉・久慈川 源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)／常陸十五城 図 十五葉・那珂川源図 老葉・久慈川源図 老葉・利 根沿岸略図 老綴(袋題)	江戸期 <small>カ</small>	国史編纂方		0202 -⑩ (全19)
常陸国	行方郡島崎村故城 (内題)	常陸十五城 図十五葉 并 那珂川源図 一葉・久慈川 源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)／常陸十五城 図 十五葉・那珂川源図 老葉・久慈川源図 老葉・利 根沿岸略図 老綴(袋題)	江戸期 <small>カ</small>	国史編纂 方		0202 -⑪ (全19)
常陸国	行方郡芹澤村古館 (内題)	常陸十五城 図十五葉 并 那珂川源図 一葉・久慈川 源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)／常陸十五城 図 十五葉・那珂川源図 老葉・久慈川源図 老葉・利 根沿岸略図 老綴(袋題)	江戸期 <small>カ</small>	国史編纂 方		0202 -⑫ (全19)
常陸国	新沼郡穴倉古城 (内題)	常陸十五城 図十五葉 并 那珂川源図 一葉・久慈川 源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)／常陸十五城 図 十五葉・那珂川源図 老葉・久慈川源図 老葉・利 根沿岸略図 老綴(袋題)	江戸期 <small>カ</small>	国史編纂 方		0202 -⑬ (全19)

常陸国	多賀郡友部村山直故城(内題)	常陸十五城 図十五葉 并那珂川源図 一葉・久慈川源図 一葉・利根沿岸略図 一綴(袋題)／常陸十五城 図 十五葉・那珂川源図 老葉・久慈川源図 老葉・利根沿岸略図 老綴(袋題)	江戸期カ	国史編纂方			0202-⑮ (全19)
常陸国	常陸下館城(内題)	常陸下館城之図(表紙題箋)	明治35.3写	石川総般	(図中)「文科大学史料編纂掛」	403	0318
下野国	野州足利古山城之図(内題／表紙題箋)	諸州城壘図 拾六鋪(袋題)	(江戸期)		(図中)角朱印「地誌備用図籍之記」	103	0025-⑩ (全14)
下野国	下野那須郡黒羽城(内題)	下野那須郡黒羽城図(絵図裏題箋)			(図中)角朱印「地誌備用図籍之記」	103	0476
下野国	太田原城図(内題／絵図裏)	下野太田原城図・烏山城図・梁田駅戦争之図 七二至七四(封筒)			(図中)角朱印「地誌備用図籍之記」	103	0483-① (全3)
下野国	下野烏山城図(絵図裏題箋)	下野 太田原城図・烏山城図・梁田駅戦争之図 七二至七四(封筒)／東京鎮台管 下野之烏山城(絵図裏)			(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0483-② (全3)
上野国	沼田家中之図 先公実録正編 長国寺殿御事蹟附録(表紙題箋)	上州利根郡沼田家中図 長国寺殿御事蹟 四(図中題箋)			(絵図裏)「東京帝国大学図書印」d	417	0301
上野国	岩櫃城之図 先公実録正編 長国寺殿御事蹟附録(表紙題箋)	上州我妻郡岩櫃城之図 長国寺殿御事蹟付録 一(図中題箋)			(図中)「東京帝国大学図書印」c	416	0305
上野国	沼田城之図 先公実録正編 長国寺殿御事蹟附録(表紙題箋)	上州利根郡沼田城之図 長国寺殿御事蹟付録 三(図中題箋)			(図中)「東京帝国大学図書印」c	416	0310
上総国	久留里古城地図(内題／表紙題箋)	諸州城壘図 拾六鋪(袋題)	(江戸期)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0025-⑦ (全14)
下総国	佐倉旧城之図(内題)	下総国佐倉旧城図(絵図裏)	明治10.5写	狩野玉信写	(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0496
武蔵国	江戸御城ノ図(内題)	江戸城絵図(絵図裏題箋)／大坂城絵図 二枚 江戸御城絵図 一枚(袋題)			(袋)「日下部文庫」	506	0187
武蔵国	江戸城之図(表紙題箋)		明治22.11写				0281
武蔵国	西丸御殿明細之図(内題)	西丸図(表紙題箋)		青山大和守			0294
越後国	越後山條城之図(内題／表紙題箋)	諸州城壘図 拾六鋪(袋題)			(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0025-⑬ (全14)
加賀国	加州金澤御城下絵図(表紙題箋)				(図中)「地誌備用図籍之記」／(絵図裏)「古本商／東京本郷区森川町一番地田中登代造」／その他1	103・730・838	0540

加賀国	加州小松城市図 (内題)	加賀国小松城市之図(絵図裏)			(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0547
若狭国	若狭国小浜城絵図 (絵図裏)		文久3				0080
越前国	越前大野城図(仮題)	越前大野城(絵図裏題箋)	江戸期写				0163
越前国	越前国福井絵図 三枚之内(絵図裏)	越前国福井絵図 三枚但・本丸・二ノ丸共(包紙表題)			(包紙)「文科大学史誌編纂掛」	402	0225-① (全2)
越前国	福井二ノ丸絵図 (内題)	越前国福井絵図 三枚 但・本丸・二ノ丸共(包紙表題) ／越前国福井二ノ丸絵図 三枚之内(絵図裏)			(包紙)「文科大学史誌編纂掛」	402	0225-② (全2)
甲斐国	甲州甲府之図 先公実録類典附録 (表紙題箋)	甲州古府之図 類典附録五 (内題題箋)	慶応4.4.23 写	於甲府山之手在陣手写 松代 飯島 與作源勝休	(絵図裏)「東京帝国大学図書印」d/その他1	417・822	0338
甲斐国	甲府城之図(表紙題箋)						0357
信濃国	信州海津城(内題)	諸州城壘図 拾六鋪(袋題) ／信州海津城之図(表紙題箋)	(江戸期)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0025-⑩ (全14)
信濃国	信濃海津城図(仮題)	河内(絵図裏)	江戸期写				0112
飛騨国	飛州高山城之図 (内題／表紙題箋)	諸州城壘図 拾六鋪(袋題)	(江戸期)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0025-⑧ (全14)
飛騨国	高山城之図(内題 ／表紙題箋)	諸州城壘図 拾六鋪(袋題)	(江戸期)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0025-⑨ (全14)
駿河国	駿府城之図(表紙題箋)	諸州城壘図 拾六鋪(袋題)	(江戸期)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0025-① (全14)
遠江国	遠江榛原郡諏訪原城 (表紙題箋)	諸州城壘図 拾六鋪(袋題)	(江戸期)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0025-② (全14)
駿河国	駿州興国寺古城 (内題)	諸州城壘図拾六鋪(袋題) ／駿州興国寺古城之図(表紙題箋)	(江戸期)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0025-③ (全14)
駿河国	駿州江尻城(内題)	諸州城壘図 拾六鋪(袋題) ／駿州江尻城之図(表紙題箋)	(江戸期)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0025-④ (全14)
駿河国	駿河藤枝田中之城 之図(内題)	駿河田中城図(仮題) ／駿州田中城(絵図裏)	江戸期写				0173
伊勢国	伊勢亀山城図(仮題)	勢州亀山(図中)					0100
伊勢国	伊勢多藝古城図 (絵図裏題箋)	藝古城図(内題)	文政12		(図中・絵図裏)「参重縣史誌掛」 ／その他1	609・834	0481
近江国	江州膳所之城絵図 (内題)	江州膳所之城図(絵図裏)	江戸期写				0171
山城国	京都伏見城図(仮題)	伏見ノ城(絵図裏)	江戸期写				0096

丹後国	丹後宮津城図(仮題)	丹後ミヤツ(絵図裏)	江戸期写				0148
摂津国	大坂城之図(表紙題箋)				(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0024
河内国	河内赤坂城図(仮題)	赤坂城(絵図裏題箋)	江戸期写				0156
河内国	河内千破屋城図(仮題)	千破屋城(絵図裏)	江戸期写				0172
摂津国	大坂御城内御殿図(内題/絵図裏題箋)						0197
摂津国	大坂城周辺図(仮題)	大坂古図(袋題)			(図中)「編輯掛之印」	810	0211-④(全4)
摂津国	大坂城全盛図(表紙題箋/絵図裏)	大坂城図 四(袋題)			(図中)「編輯掛之印」	810	0223-④(全4)
摂津国	大坂城絵図 二幀之内(絵図裏題箋)				(図中)「帝国大学臨時編年史編纂掛」/ (図中)「日下部文庫」	401・506	0280
摂津国	大坂御本丸御殿之絵図(内題/封筒表題)	大坂城絵図 二幀之内(絵図裏題箋)			(図中)「帝国大学臨時編年史編纂掛」/ (図中)「日下部文庫」	401・506	0284
摂津国	摂津尼崎城図(仮題)	摂津尼崎城(図中)/摂津尼ヶ崎城(絵図裏)/摂津尼崎城(絵図裏)	江戸期写				0099
因幡国	因幡 鳥取城図(内題)	鳥取城図(表紙題箋)			(図中)「字野」/ (図中)「小野」	706・707	0274
阿波国	とく嶋の城(内題)	徳島城図(表紙題箋)	昭和3.4.26模	勝徳模	(図中貼付・絵図裏)「東京帝国大学文学部史料編纂掛」	404	0073
阿波国	阿波徳島城図(仮題)	阿波徳島(絵図裏)	江戸期写				0157
讃岐国	讃岐八島城図(仮題)	何レノ城カ不知図 讃岐八嶋辺(絵図裏題箋)	江戸期写				0104
伊予国	うわ嶋之城(内題)	宇和島城図(表紙題箋)	昭和3.5.3模	勝徳模	(図中貼付)「東京帝国大学文学部史料編纂掛」	404	0076
伊予国	松山之城(内題)	松山城図(表紙題箋)	昭和3.5.3模	勝徳模	(図中貼付)「東京帝国大学文学部史料編纂掛」	404	0078
土佐国	かうち之城(内題)	高知城図(表紙題箋)	昭和3.4.26模	勝徳模	(図中貼付)「東京帝国大学文学部史料編纂掛」	404	0077
肥前国	肥前国嶋原城図(内題)	嶋原城図 犬甘本(表紙題箋)	高力左近大夫隆長時代				0340
肥前国	原之城図(内題)	原之城図 一幀(表紙題箋)	明治18.4写	御用掛 浮田可成写	(図中)「修史館図書印」	204	0377
肥後国	球麻城絵図(表紙題箋)		宝永5閏1.10		(図中)「帝国大学図書之印」	411	0355

肥後国	肥後人吉城図(表紙題箋)				(図中)「修史館図書印」/(絵図裏)「東京帝国大学図書印」d	204・417	0360
豊後国	豊後州直入郡竹田岡城図(内題/絵図裏題箋)	豊後 直入郡竹田岡城図一・海部郡臼杵市坊図一・海部郡佐伯市坊図一(袋題)			(図中)「修史館図書印」/(図中)「東京帝国大学図書印」c	204・416	0295 -① (全3)

* () 内は地図におけるそれぞれの記載箇所を示す。* 地図中の記載によるものは「 」で示した。
* 「印文」欄で「その他」と一括したのものについても、「印番号」欄ではそれぞれの印に付した番号を記載している。

付表2 「村絵図」一覧表

国名	地図名称(標準名)	地図名称(その他)	年代	伝来および作成者	印文	印番号	請求番号
(広域)	酒匂川・富士川・安倍川・大井川・天龍川堤川除用悪水御(郷)普所村絵図其外谷川内郷共(表紙題箋)						0040
常陸国	常陸国真壁郡関館村あら絵図面(内題)	常陸関館村絵図(表紙題箋)	明治35・3写	常陸国真壁郡若柳村石島嘉平蔵本(絵図裏に「茨城県真壁郡若柳村石島嘉平」の附箋あり)	(図中)「文科大学史料編纂掛」	403	0319
武蔵国	武州秩父郡伊古田村絵図面(内題/絵図裏鉛筆書き)				(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0012
武蔵国	武州秩父郡寺尾村絵図(内題)	秩父郡寺尾村絵図(絵図裏鉛筆書き)	天保5.3		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0016
武蔵国	武蔵狭山茶産村々概略(内題)	武蔵狭山茶産村々略図(絵図裏)	明治		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0054 -① (全2)
安房国	安房国安房郡北條村図面(内題)		明治10.2.19差出		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0465
上総国	上総市原郡村上村絵図(表紙題箋)		天保11.6	上総市原郡村上村名主吉兵衛ほか3名。			0482
甲斐国	市川陣屋附甲斐国八代巨摩郡村々絵図(袋/絵図裏題箋)		(幕末)	(安藤伝蔵)	(袋裏)その他1	803	0050
遠江国	遠江国天龍川添十七ヶ村図(絵図裏)	図二 天龍川添十七ヶ村図(絵図裏)	(明治元~4)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0022
信濃国	信濃国小縣郡村々図(絵図裏)(禰津領)	(禰津領)/信濃国小縣郡(図中)			(絵図裏)「地誌備用図籍之記」	103	0258
信濃国	信州佐久郡村々図(絵図裏)				(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0268

信濃国	筑摩郡徳原村(絵図裏)				(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0477 -① (全3)
信濃国	伊奈郡八ヶ村図(絵図裏)						0477 -② (全3)
信濃国	伊奈郡八ヶ村図・沢村・松島村・木下村・久保村(絵図裏)				(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0477 -③ (全3)
遠江国	遠江国豊田郡中泉村略図字今ノ浦中泉村耕地(内題題箋)	遠江国豊田郡中泉村略図(絵図裏)	明治		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0045 -⑤ (全5)
三河国	三河国碧海郡大濱村(内題)	三河国大濱(絵図裏)	(明治写)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0001 -① (全4)
三河国	三河国幡豆郡西尾(内題)	三河国西尾(絵図裏)	(明治写)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0001 -② (全4)
三河国	三河国加茂郡挙母村(内題)	三河国挙母(絵図裏)	(明治写)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0001 -③ (全4)
三河国	三河国渥美郡豊橋(内題)	三河国豊橋(絵図裏)	(明治写)		(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0001 -④ (全4)
近江国	近江国高島郡岸脇村絵図(内題)	近江国絵図四七至五七(封筒)					0495 -① (全11)
近江国	近江国高島郡蘭生村絵図(内題)	近江国絵図四七至五七(封筒)					0495 -② (全11)
近江国	近江国高島郡上弘部村絵図(内題)	近江国絵図四七至五七(封筒)					0495 -③ (全11)
近江国	近江国高島郡大供村絵図(内題)	近江国絵図四七至五七(封筒)					0495 -④ (全11)
近江国	近江国高島郡永田村絵図(内題)	近江国絵図四七至五七(封筒)					0495 -⑤ (全11)
近江国	近江国野洲郡戸田村絵図(内題)	近江国絵図四七至五七(封筒)					0495 -⑥ (全11)
近江国	近江国野洲郡虫生村絵図(内題)	近江国絵図四七至五七(封筒)					0495 -⑦ (全11)
近江国	近江国栗本郡蜂屋村絵図(内題)	近江国絵図四七至五七(封筒)					0495 -⑧ (全11)
近江国	近江国高島郡南深清水村絵図(内題)	近江国絵図四七至五七(封筒)					0495 -⑨ (全11)
近江国	近江国蒲生郡竹村絵図(内題)	近江国絵図四七至五七(封筒)					0495 -⑩ (全11)

近江国	近江国蒲生郡西宿村絵図(内題)	近江国絵図四七至五七(封筒)					0495 -① (全11)
播磨国	丹波長門守領分播州加東郡村々之内上三草村・下三草村・山口村・下久米村・上久米村(内題)	播磨国加東郡之内(袋)／播磨国上三草村・下三草村・山口村・下久米村・上久米村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改添		その他 2	835・836	0511 -① (全3)
播磨国	丹波長門守古井大炊頭領分入組播州加東郡村々之内貞守村(内題)	播磨国加東郡之内(袋)／播磨国貞守村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改添		その他 2	835・836	0511 -② (全3)
播磨国	丹波長門守領分播州加東郡村々之内山国村・下小田村(内題)	播磨国加東郡之内(袋)／播磨国下小田村・山国村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改添		その他 2	835・836	0511 -③ (全3)
播磨国	丹波長門守領分播州美囊郡村々之内沖村(内題)	播磨国美囊郡之内(袋)／沖村(絵図裏題箋)	明治7.11.7調添		その他 1	836	0512 -① (全3)
播磨国	丹波長門守領分播州美囊郡村々之内奥谷村(内題)	播磨国美囊郡之内(袋)／奥谷村(絵図裏題箋)	明治7.11.7調添		その他 1	836	0512 -② (全3)
播磨国	丹波長門守領分播州美囊郡村々之内北畑村(内題)	播磨国美囊郡之内(袋)／北畑村(絵図裏題箋)	明治7.11.7調添		その他 1	836	0512 -③ (全3)
播磨国	丹波長門守領分播州加西郡村々之内国正村・奥山寺村(内題)	播磨国加西郡之内(袋)／国正村・奥山寺村(袋)／国正村奥山寺村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他 1	836	0553 -① (全5)
播磨国	丹波長門守領分播州加西郡村々之内山川村・田井村・馬渡谷村(内題)	播磨国加西郡之内(袋)／馬渡谷村・田井村・山川村(袋)／山川村・田井村・馬渡谷村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他 1	836	0553 -② (全5)
播磨国	丹波長門守領分播州加西郡村々之内明楽寺村・水尾村・落方村(内題)	播磨国加西郡之内(袋)／明楽寺村・水尾村・落方村(袋)／明楽寺村・水尾村・落方村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他 1	836	0553 -③ (全5)
播磨国	丹波長門守領分播州加西郡村々之内合山村(内題)	播磨国加西郡之内(袋)／合山村(袋)／合山村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他 1	836	0553 -④ (全5)
播磨国	丹波長門守領分播州加西郡村々之内上三原村中三原村(内題)	播磨国加西郡之内(袋)／中三原村上三原村(袋)／上三原村中三原村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他 1	836	0553 -⑤ (全5)
播磨国	丹波長門守一橋大納言領分入組播州多可郡村々之内野村(内題)	播磨国多可郡之内(袋)／野村(袋)／野村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他 1	836	0554 -① (全9)
播磨国	丹波長門守領分播州多可郡村々之内和田村・谷村(内題)	播磨国多可郡之内(袋)／和田村・谷村(袋)／和田村・谷村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他 1	836	0554 -② (全9)
播磨国	丹波長門守松平下総守領分入組播州多可郡村々之内西林寺(内題)	播磨国多可郡之内(袋)／西林村(袋)／西林村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他 1	836	0554 -③ (全9)

播磨国	丹波長門守領分播州多可郡村々之内福地村(内題)	播磨国多可郡之内(袋)／福地村(袋)／福地村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他1	836	0554-④(全9)
播磨国	丹波長門守領分播州多可郡村々之内門柳村(内題)	播磨国多可郡之内(袋)／門柳村(袋)／門柳村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他1	836	0554-⑤(全9)
播磨国	丹波長門守一橋大納言領分入組播州多可郡村々之内喜多村(内題)	播磨国多可郡之内(袋)／喜多村(袋)／喜多村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他1	836	0554-⑥(全9)
播磨国	丹波長門守領分播州多可郡村々之内黒田村・船町村(内題)	播磨国多可郡之内(袋)／墨田村・船町村(袋)／黒田村・船町村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他1	836	0554-⑦(全9)
播磨国	丹波長門守領分播州多可郡村々之内坂本村(内題)	播磨国多可郡之内(袋)／坂本村(袋)／坂本村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他1	836	0554-⑧(全9)
播磨国	丹波長門守桜井遠江守領分入組播州多可郡村々之内中野間村(内題)	播磨国多可郡之内(袋)／中野間村(袋)／中野間村(絵図裏題箋)	明治7.11.7改済		その他1	836	0554-⑨(全9)
播磨国	赤穂之図村々(絵図裏)				(図中)「地誌備用図籍之記」	103	0555

* ()内は地図におけるそれぞれの記載箇所を示す。*地図中の記載によるものは「」で示した。
*「印文」欄で「その他」と一括したものについても、「印番号」欄ではそれぞれの印に付した番号を記載している。

のだが、他は、データベース作成上の都合から、地図の請求番号の順に適宜、付した番号となっている。

- ・「印文」欄において印文を示した。
- ・「所有者」欄にはそれぞれの印を使用したとみられる機関名あるいは人名を掲載した。
- ・「点数」欄は「内務省引継地図」において、その印が使用されている地図の点数を示した。

第一章でいくつか触れたように、「内務省引継地図」には、よく知られている近世の「蔵書印」が存在する。彼らは蔵書家としても知られている人物である。そのうちのいくつかを図版として掲載した。先に触れた、大田南畝の「南畝文庫」(写真4)および「大田氏蔵書」(写真5)、小宮山楓軒・南梁の「小宮山氏収蔵図書之記」(前掲写真1)、彰考館の「彰考館」(前掲写真2)の他、立原翠軒の「此君堂蔵本」(前掲写真3)、屋代弘賢の「不忍文庫」²⁵⁾などである。(写真6)

大田南畝については、「内務省引継地図」のうち、第一章で紹介した地図を含め、南畝に関係した記述の見える地図が四点ある。「鶴瀬宿ヨリ駒

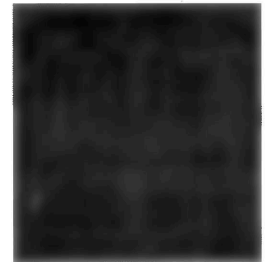


写真4
「南畝文庫」
(2.7×2.7cm)



写真6
「不忍文庫」
(4.0×2.0cm)



写真5
「大田氏蔵書」
(3.9×1.0cm)

飼夫ヨリ天目山迄之鹿絵図」(00211⑤)、「江戸古図」(0297)、「武州荏原郡図」(0454)、「佐渡国之図」(0551)で、このうち「鶴瀬宿ヨリ駒飼夫ヨリ天目山迄之鹿絵図」に「南畝文庫」の蔵書印が押されている。また「佐渡国之図」に「大田氏蔵書」の一行印の蔵書印が押されている。この二つの印は併用されることが多く、前者は巻首に、後者は時として巻末に押してあるという²⁷⁾。しかし「内務省引継地図」中で、南畝の蔵書印を有する、この二点の地図には、二つの印は同時に押されていない。南畝の蔵書印についてはまた「蜀山人」などの印文を持つものもある²⁸⁾。また別に落款印も多い²⁹⁾。南畝は別号も多かったことも関係し、印も様々なものを使用していたと考えられる。

南畝の蔵書は没後、青山堂の手に帰したとされているが、後には諸方に散逸してしまう。「鶴瀬宿ヨリ駒飼夫ヨリ天目山迄之鹿絵図」には、江戸後期の幕臣で長崎奉行や西丸御留守居役も勤めた内藤忠明の「月の屋」印(写真7)がみえるなど地図がさまざまな人物の手を渡り、伝来してきたことを示している。なお、南畝旧蔵地図にみえる印は共に実際に押されたものである。

また、小宮山楓軒・南梁の蔵書印も数種が知られており、そのうち先に紹介した「小宮山氏収蔵図書」の蔵書印は一般に楓軒の使用した印とされている。しかし、これを南梁も使用していたことが、先述した「慶長江戸

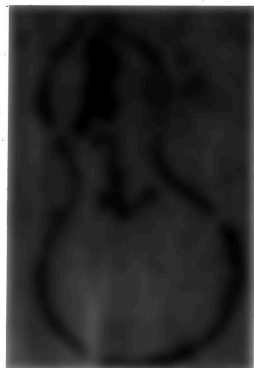


写真7
「月の屋」
(5.6×3.2cm)

図」、その他から類推できる。まず、第一章で紹介したように、「小宮山氏収蔵図書」の印が押されている、先述した国立国会図書館蔵『養花庵襟著』の「慶長江戸図略説」の考証は小宮山南梁によるものであること、これは「小宮山氏収蔵図書」の印は楓軒のみならず、南梁も使用していたことを示している³⁰⁾。

さらに、これも第一章で取り上げた「慶長江戸図」のc図には、東京府の印記が押されているように、東京府から引継いだ地図のうちである。朱書きで「明治十三年四月 華族松浦家ノ蔵本ヲ得テ写ス」(以下、表1にも掲載)との記載がある。この記載に続いて「東京府記録掛」とあり、さらに「小宮山」の朱印が押されているのだが、これは南梁の印と考えられる。この印は表3-4に掲載したものである。

南梁は明治九年(一八七六)より大蔵省勤務、東京府で地理志編纂を行ったことから、この地図の記載は南梁による考証であると考えられる。さらにまた東京都立中央図書館蔵『尚存図書保存始末』の南梁の署名下にはc図と同じ「小宮山」印が押されていることもその証左となろう。

以上のように、表3-2で「近世の蔵書印」として区分したものは、江戸時代中期～後期の人物や「文庫」の蔵書印によるものが多い³⁰⁾。

また、近代以降の印については、修史事業に関わった機関の印によるもので、特に「地誌備用図籍之記」の印文を持つ、内務省地理局地誌課の印



写真8
「地誌備用籍之記」
(4.2×2.7cm)

(表3) 「内務省引継地図」(第一群) 印一覽

(表3-1) 近代以降の印

印番号	印 文	所 有 者	点 数	
101	「正院地志課図籍之記」	太政官正院地誌課	1	
102	「地理寮地誌課図書之記」	内務省地理寮地誌課	1	
103	「地誌備用図籍之記」	内務省地理局地誌課	389	写真8
104	「内務省地理局」	同上	22	
201	「歴史課図書印」	太政官正院歴史課	2	
202	「修史局」		5	
203	「修史局図書印」		2	
204	「修史館図書印」		23	
205	「館」	(修史館カ)	5	
206	「修史局印」	内閣臨時修史局	2	
301	「図書局文庫」	内務省図書局	1	
401	「帝国大学臨時編年史編纂掛」	帝国大学臨時編年史編纂掛	7	
402	「文科大学史誌編纂掛」	文科大学史誌編纂掛	16	
403	「文科大学史料編纂掛」	文科大学史料編纂掛	12	
404	「東京帝国大学文学部史料編纂掛」	東京帝国大学文学部史料編纂掛	11	
405	「史料編纂所備用」		3	
406	「史料編纂所図書之印」		4	
407	「史料」		1	
408	「東京大学史料」		2	
411	「帝国大学図書之印」「帝国大学図書館」	帝国大学図書館	1	
412	「東京帝国大学附属図書館」	東京帝国大学附属図書館	43	写真15
413	「東京帝国大学図書印」 a	同上	2	写真16
414	「東京帝国大学図書印」 b	同上	7	写真17
415	「東京帝国大学図書」	同上	2	
416	「東京帝国大学図書印」 c	同上	28	写真19
417	「東京帝国大学図書印」 d	同上	24	写真18
418	「東京帝国大学図書印」 e	同上	9	
419	「東京大学図書」		1	

(表3-2) 近世の印

印番号	印 文	所 有 者	点 数	
501	「南畝文庫」	大田南畝 a	1	写真4
502	「月の屋」	内藤忠明	2	写真7
503	「齋藤氏」「月岑」	齋藤月岑	1	
504	「不忍文庫」	屋代弘賢	1	写真6
505	「長井十足蔵印」「長井之印」	長井千足	1	

506	「日下部文庫」	日下部陽東	3	
507	「小宮山氏収蔵図書」	小宮山楓軒・南梁	1	写真1
508	「彰考館」	彰考館	2	写真2
509	「此君堂蔵本」	立原翠軒	1	写真3
510	「埴矛文庫」	蜂屋定翁	2	
511	「中川家蔵書印」	中川忠英	1	
512	「正勝之印」	堀田正勝	2	
513	「大田氏蔵書」	大田南畝 b	1	写真5

(表3-3) 府県関係の印

印番号	印文	所有者	点数	
601	「東京府図書記」	東京府	6	
602	「京都府地理掛図書之印」	京都府地理掛	1	
603	「京都府図書印」	京都府	1	
604	「宮城縣地誌編輯係印」	宮城県地誌編輯係	2	
605	「茨城縣史誌編輯係印」	茨城県史誌編輯係	2	
606	「壬生藩」	壬生藩	1	
607	「三瀧縣史誌編輯係之印」	三瀧縣史誌編輯係	3	
608	「福岡縣國史地誌編輯科之印」	福岡縣國史地誌編輯科	1	
609	「參重縣史誌掛」	三重県	1	

(表3-4) 個人を示す印

印番号	印文	所有者	点数	
701	「鈴木」		2	
702	「榊」		14	
703	「吉村」		1	
704	「幸田」		1	
705	「杉浦」		1	
706	「宇野」		1	
707	「小野」		1	
708	「加藤」	加藤熊吉	2	
709	「名」	八等掌記 名倉信敦	2	
710	「可成」	御用掛 浮田可成	2	
711	「規道」	四等掌記 瀧澤規道	3	
712	「村山」		1	

713	「重野」	修史局編修長 重野安禪	1
714	「澤渡」	澤渡廣孝	4
715	「小島」		1
716	「福土」	福土成豊(地理課地理係カ)	2
717	「田中」		4
718	「不二雄」	内務七等属 高橋不二雄	13
719	「櫻井」		26
720	「山岡」		1
721	「小省」		1
722	(吉澤幸之助印)		1
723	(高木印)	高木栄太郎カ(0391にあり)	1
724	「謙吾」		1
725	「秦氏」「檜丸」	秦檜丸	1
726	(差出人：福間実五郎印)		2
727	(差出人：川北徹蔵印)		2
728	「松平」	松平次郎カ	2
729	「三上教授在職二十五年祝賀記念奨学資金購入図書之記」	(三上参次関係)	2
730	「古本商 東京本郷区森川町一番地 田中登代造」	古本商 田中登代造	2

(表3-5) その他

印番号	印 文	所 有 者	点 数
805	「梨本氏蔵書」	梨本弥五郎	1
806	「駒井図書」		1
807	「竹越氏蔵書章」	竹越興三郎	1
808	「新」		1
810	「編輯掛之印」		17
811	「編纂掛」		1
819	「樋山蔵書」		1
826	「西成文庫」		1
829	舊幕引継書		5
830	御善請方沿革調		5
831	「小倉蔵」		1
838	「群庶軒印」		1

*その他20余の印がある。

が最も多い。「内務省引継地図」第一群、全九八二点中の四割近くに押されている(写真8)。これは内務省地理局地誌課の段階において、多くの地図が整理・保存されていたことを示すものである。

2 「内務省引継地図」に関わった機関

表3で示した印を修史事業に関わった機関と関連づけ、東京大学史料編纂所に伝来するまでの経緯を年代と共にまとめたものが、表4「内務省引継地図」収集機関―所蔵印対照表」である。明治政府による修史事業の開始から、地図群が東京大学史料編纂所に移管されるまでの流れを示している。表4は、表3の印に対応する諸機関を、その設立年代を追ってその名称を掲載し、同時に「」によって対文する印文を掲載した。印文に()で付記した数字は同じく表3の印番号である。なお、それぞれの印の使用開始時期については内務省図書局の「図書局文庫」の301印のようには、判然としないため、その機関の設立開始年代と共に印文を掲載しているが、これはそれらの印の使用開始時期を示すものではない。また、内務省地理局の「地誌備用図籍之記」の103印や「内務省地理局」の104印のように、場合によっては複数の印を対応させているものもある。表4から、明治五年(一八七二)〇月に設置された太政官正院歴史課、同地誌課で収集した地図(請求番号0373・0374・0538)に始まり、昭和四五年(一九七〇)七月に史料編纂所で購入した地図(0162)までが含まれていることがわかる。印文でいえば太政官正院歴史課の「歴史課図書印」および同地誌課の「正院地誌課図籍之記」に始まり、史料編纂所の「史料編纂所備用」「史料編纂所図書之印」「史料」「東京大学史料」までを含んでいるのである。

以上、本章では「内務省引継地図」(第一群)にみえる印のほとんどを

提示し、よく知られている近世の蔵書印についても紹介した。また、近代以降については、それぞれの印を使用した機関と対照し、年代順に整理した上で、「内務省引継地図」がいかなる機関の手によって伝来してきたかについて示したものである。

三 「内務省引継地図」からみた地図史料の収集・整理

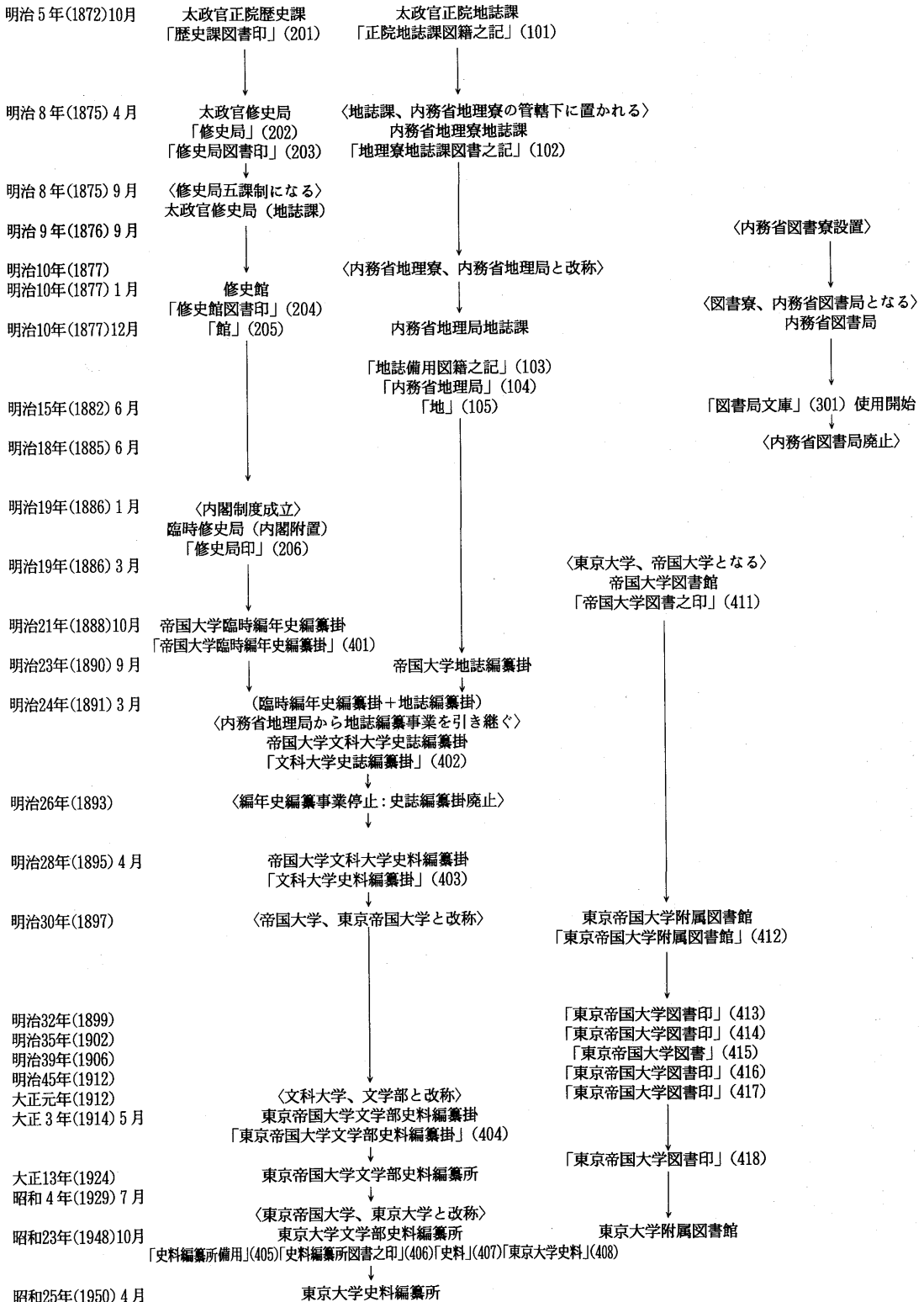
1 修史事業における地図史料の収集・整理

第一群の地図のなかには印による伝来ともに、地図収集や地図の整理状況についての手がかりが存在する。これらの手がかりは、第一群の地図の中でもすべてに存在しているわけではないから、すべてを系統的に把握することは困難であるが、いくつかの指標となる要素をもっている。ここではそれらについて紹介したい。

① 「旧番号」について

先述したように「内務省引継地図」には「旧番号」と呼べる番号が付されている。これは地図の表紙などに付されたラベルに記載されている番号で、「640―史―1」のように三段階のレベルで表記されている。便宜上、「640」の部分を第一レベル、「史」の部分を第二レベル、「1」の部分第三レベルと呼ぶことにする。なお、第二レベルが空欄となっているものも多い。「旧番号」は第一群のうちの七六七点に付けられている。なお、「旧番号」がないもの(データベースでは「旧本」としたものを含む)は二一五点で、ラベルは貼付されていない。「旧番号」はこの「内務省引継地図」内のみでつながっているわけではない。内務省から引き継いだ地図の中には、すでに一般の書架に配架されている地図も存在するのである。但し「旧番号」のうち、いくつかの番号についてはある程度分類可能であるので、ここにその例をあげてみよう。

(表4) 「内務省引継地図」(第一群) 収集機関-印対照表



例えば、第一レベル「0116」の「0116—09」「0116—11」の二点は大正五年六月に横写されたものという事で共通する。帝国大学附属図書館のラベルの番号は連続し、同じ印も押されている。同様に「0117—4」「0117—5」「0117—7」の三点についても「大正五年十一月二十五日」付けの帝国大学附属図書館の印がおされ、これも第一レベルでのつながりがある。また、「423—43」→「423—53」の地図は『先公実録』（請求番号2075・887（889）の付図などである。また、「476—史—17」→「476—史—19」「476—史—21」は「江戸図」に関わるものである。

なお、旧番号の第一レベルで最も多い点数は640番台である。これらの点については今後も詳細な検討により伝来などが判断できる可能性がある。

②内務省地理局地誌課における地図の分類

第一章で触れたように、第一群の地図には表紙や地図裏などに「総国支部」「武蔵」などの題箋を有するものがある。特に旧国名やそれに類する「武蔵」などの題箋を有するものは五二六点で、「内務省引継地図」第一群の半数以上になる。これらの地図には、題箋部分または地図裏などの箇所に「地」の印文をもつ丸朱印を有するものがほとんどである。これらを一覧で掲載したのが次の表5である。

表には示していないが、そのほとんどが103印あるいは104印を有する地図である。そして101印・102印を持つ地図も含んでいる。これらの地図が内務省地理局地誌課の段階において分類されたものであり、「地」の印は地誌課において使用されたものと考えられる。³⁵⁾

③史料採訪について

各地図の表紙には「○○採訪」といった題箋が貼り付けられているものがある。表6はこれらをも含め各府県への採訪による地図としてまとめたものであり、史料蒐集を行った年代とその府県名および採訪者について、地図の記載をもとに作成した。また、表3—4で個人を示す印として区分したものの中には、帝国大学の段階での史料採訪を行った人物と名前が一致しているものもあるので、合わせて参照していただきたい。



写真9 1.8×6.3cm
題箋の大きさは6.3cm×1.8cm
が小さい。写真の大きさは1.8cm×6.3cm
で大きい。

また他に「史別二一」などの題箋が付けられた地図もあり、これらの地図に共通するのは「文科大学史誌編纂掛」の印であるなど、「内務省引継地図」(第一群)では、多くの印のほかにも、数種の題箋の記載や旧番号などによって、史料編纂所に連なる諸機関の段階での地図の収集・整理の状況が、判断可能なものとなっている。

2 海軍文庫の印と地図史料の収集・整理

次に第二群とした海軍文庫の地図収集について見てみよう。

第二群は、海軍関係の所蔵印やラベルを有する地図である。中には数点のみ印およびラベルなどを有さない地図があるが、内容としてはすべて陸地測量部およびこれに連なる諸機関によって作成された、二万分一迅速測図などの地図を収集したものであり、すべて海軍に関わる機関で収集・保存していた地図群と違って差し支えない。全九八一点の地図のうち、一点のみ内務省地理局地誌課作成の「伊豆七島並小笠原群島之図」(大日本全図

(表5) 内務省地理局地誌課地図分類表

名称	点数	旧国名およびそれに類する題箋	請求番号
北海之部	4	北海道	402・417・418・423
東山之部	39	羽後・羽前・陸前・信濃・近江・上野・飛騨・美濃・陸中・磐城・岩代	267・268・436・440・442・444・447・448・450・452・474-④・475・477-①③・478・484・486-①②③⑥・487-①②④⑤・488・489・490・491・492・493
東海之部	54	下総・安房・東京・上総・遠江・駿河・武蔵・下総・伊勢・甲斐・常陸・尾張・常陸下総	8・13・15・22・26・28・29・30・31・32・37・38・41・45・49・54・56・433-①~④⑦⑧・434・437・439・446・457・465・466・467・496・498-①
北陸之部	17	加賀・越前・越中・佐渡	500・501・510・534・535・539・540・546・547・550・551
五畿内ノ部	13	大坂・摂津・大和	5・6・63・64・65・66・67・43・242・245・248・249・250
山陽之部	45	長門・備前・備後・周防・播磨・美作・備中・安芸	396・399・400・401・405・410・411・412・414・459・460・461・462・502・503・504・505・506・507・508・509・511・516・553・554・555・556・557・558・559
山陰之部	11	丹後・石見・出雲・隠岐	514・519・530・537・543・544
南海之部	8	紀伊・讃岐・伊予	251・252・392・393・394・395・499・529
西海之部	19	豊前・肥後・筑前・筑後・豊後・日向	387・388・397・398・408・415・416・420・521・524・525・527・528
総国之部(→2国以上のものや国全体のものなど広域の地図)	35	上野下野・安房上総下総・上総下総・尾張三河・丹波丹後・上野武蔵・筑前筑後・因幡伯耆・阿波土佐・摂津河内・総国	11・27・42・254・257・389・407・435・443・463・470・515・545

*この表に限り、請求番号は4桁表示していない。

(表6) 史料探訪一覧表

年代	探訪先	探訪者	「内務省引継地図」にあるもの		請求番号
明治6年(1873)5月	〈太政官は歴史課御用掛 伊藤十郎平を宮城県へ史料の調査・探訪のため出張させる。〉	伊藤十郎平			
明治7年(1874)3月					
明治18年(1885)7月~9月	修史館の関東六県史料探訪(神奈川県、埼玉県、群馬県、千葉県、茨城県、栃木県)	重野安鐸、日下寛、田中義成、小倉秀貫			
明治19年(1886)	京都府、大阪府、滋賀県	星野恒、佐々木凌	「山城探訪」	明治26.5影写	0246
			「丹波探訪」	明治20影写	0342
			「大和探訪」	明治21.2星野恒影写	0261
明治20年(1887)	福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県	久米邦武	「日向探訪」		0293
明治21年(1888)	兵庫県、和歌山県、徳島県、高知県、愛媛県	重野安鐸、松浦辰男			
			重野安鐸	「土佐探訪」	明治22.2重野模写
		修史局編修 久米邦武探訪	「讃岐探訪」	明治22.6重野影写	0313
			「日向探訪」		0312

明治22年(1889)	茨城県、宮城県、福島県、岩手県	星野恒、岡田正之	「陸中探訪」	明治23.3影写	0334
	静岡県、山梨県、長野県	星野恒、田中義成			
明治26年(1893)	〈編年史編纂事業停止：史誌編纂掛廃止。これまでに史料探訪は、関東六県・岩手・宮城・福島・長野・山梨・静岡・滋賀・京都・大阪・兵庫・和歌山・徳島・高知・愛媛・福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島〉				
明治28年(1895)	京都府(醍醐寺三寶院)	小中村義象、和田英松			
	鳥取県、島根県	田中義成、田山実、山田安榮、三浦周行			
明治29年(1896)	愛知県、三重県	小中村義象、佐藤球			
	岡山県、広島県	三上参次、小倉秀貫			
	山口県	三上参次、櫻村敬頭、山田安榮			
明治30年(1897)	京都府、新潟県、富山県、奈良県	三上参次、山縣昌藏			
	福井県、石川県	田中義成、鈴木圓二			
	島根県(出雲国杵築千家北島両家)	三浦周行	「出雲探訪」	「寄贈」	

第四号附図(0608)が存在するが、この地図にも以下で紹介するような海軍関係の印が押されている。

明治十一年に成立した参謀本部は「全国測量計画」の第一段階として迅速測図作成を開始した。その後、明治末年まで地形図などを作成したが、本地図群はこれを順次収集したものであるといえる。

なお、海軍文庫の蔵書については、昭和二〇年の海軍解体により海軍文庫蔵書の大半が、一旦東京大学に受け入れられていることが知られている。その後、一部は都立の各図書館などへ移送されているもの、現在東京大学総合図書館および教養学部図書館に所蔵されている図書は、各所に残存している海軍文庫旧蔵書のなかでも最大のものと考えられている。³⁷⁾これに対し、第二群は印を全く有さない数点の地図の他は、すべてそれ以前の大正三年(一九一四)五月一〇日の記載を持つ、東京帝国大学附属図書館の受人印を有している。

上の表7は第二群の印を一覧表にしたものであり、表8でこれらの印と機関との対照を示したものである。明治十九年(一八八六)三月に設置された海軍軍令機関、参謀本部海軍部の「参謀本部海軍部図書之印」(写真10)に始まり、続く明治二十一年(一八八八)五月設置の海軍参謀本部の「海軍参謀本部図書印」(写真11)を経た後、「文庫」の文字を含む印が使用される。(写真12・13)³⁸⁾これらは海軍省の図書館の名称である。明治二十二年(一八八九)「海軍中央文庫」として官制が制定され、その後明治二十六年(一九一三)には「海軍文庫」と名称が変更された。なお、第二群には一点のみ、海軍大臣官房記録課の「海軍大臣官房記録庫」の印を持つ地図がある。

第二群は以上のような経過をたどる中で、陸地測量部に連なる機関によって作成された地図を海軍文庫において収集・整理したものといえる。なお、この地図群のうちほとんどものに、海軍中央文庫あるいは海軍

(表7)「内務省引継地図」(第二群) 印一覧

印番号	印文	所有者	点数	
1101	「参謀本部海軍部図書之印」	参謀本部海軍部	170	写真10
1102	「海軍参謀本部図書印」	海軍参謀本部	40	写真11
1103	「海軍図書之印」 a	海軍文庫	610	写真12
1104	「海軍図書之印」 b	同上	284	写真13
1201	「中央文庫 陸図」	海軍中央文庫	337	写真14
1202	「中央文庫 和漢図」	同上	142	
1203	「中央文庫」	同上	76	
1204	「海軍文庫 和漢図」	海軍文庫	436	
1301	「消印」		232	
1302	「海軍文庫 消印」(青色)	海軍文庫	791	
1303	「海軍文庫 消印」(朱色)	同上	190	
1401	「海軍大臣官房記録庫」	海軍大臣官房記録課	1	
1501	「甲」		51	
1502	「乙」		645	
415	「東京帝国大学図書」	東京帝国大学附属図書館	84	
416	「東京帝国大学図書印」 c	東京帝国大学附属図書館	894	写真18

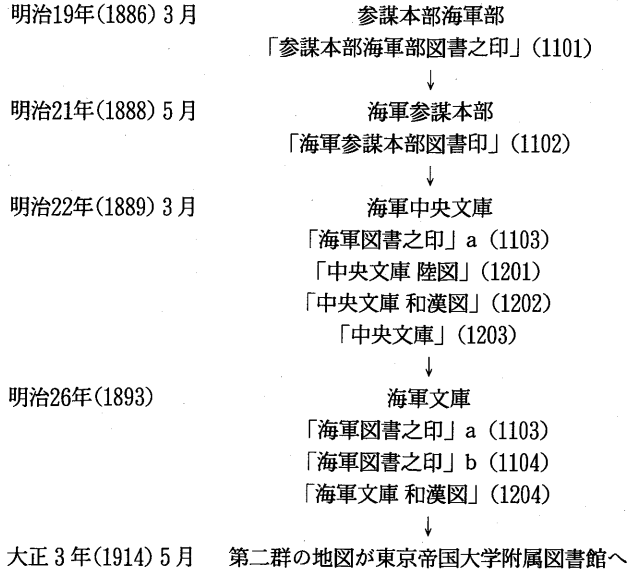
文庫による番号が付されていることに注意したい。「中央文庫 陸図 甲 一八六一」などの表記である。各地図に押された印や、表紙などに付けられたラベルにもこの番号が記載されている(写真14)。これは海軍文庫において付けられた番号であると考えられるが、ほとんどの地図に記載されているこの番号から、各文庫に収集された段階が把握できる。それを示したのが、次の表9-1「海軍文庫蔵地図整理表」(海軍文庫期)である。これは地図に記載された番号と印、及び地図の収集段階での機関名を対照表にしたものである。

表9-1に示した通り、番号は100番台の「中央文庫 陸図」の印に始まる。この段階では番号に「甲」の文字が付されており、甲100番台から甲300番台までの地図には1101印がおされていることも共通する。番号は2300番台までであるがこれは地図が順次、収集・整理されていたことを示すものとなっている。

これらの地図が、大正三年(一九一四)に帝国大学附属図書館に移管されると、その内容毎に番号が付けられた。それを示したものが次の表9-2「海軍文庫地図整理表」(東京帝国大学期)である。表では地図のそれぞれの内容についても掲載した。特に二万分一図については三つの種類に細分できる地図すべてを一括して「194590」として区分していることがわかる。

さて、海軍の地図収集であるが、表7における1101印(写真10)は「明治十五年」の記載のあるものから、「明治二十一年四月二十五日出版」の記載までの地図である。地図にはその作成者あるいは版權所有者として「大日本帝国参謀本部陸軍部測量局」または「参謀本部陸軍部測量局」の記載がある。これは参謀本部海軍部が設置されていた時期(明治一九年三月〜明治二十一年五月)とほぼ合致するものであり、参謀本部陸軍部で作成した段階の地図は、同時期において参謀本部海軍部で順次収集したもので

(表8) 「内務省引継地図」(第二群) 収集機関一印対照表 <海軍文庫の変遷>



あることが考えられよう。

また「参謀本部海軍部図書之印」の1101印と「海軍参謀本部図書之印」の1102印(写真11)は同じ地図に押されていることはない。地図が引き継がれていく中で、新たに収集した地図に対してのみ、その当時の機関の印が押されるものであったことがわかる。しかし、その後の1103印(写真12)または1104印(写真13)は上記二つの印と同じ地図に押しあがることが多い。この段階では新たに引き継いだものに対しても当時の印を押すことになっていったものと考えられる。

なお1103印と1104印が同じ地図上に押されることはない。それは表9-1が示す通りである。表9-1より、番号が新しくなるものに1104印が使用されていることがわかる。1103印については1101印との併用もあることからいって、1104印は1103印よりも新しいものであるといえるだろう。

第二群の地図の整理に関するものとしては、さらに以下のような点も指摘できる。

同じ地域の地図が例えば三点存在する場合、番号は例えば「610-1-1」「610-2-1」と付けられ、1201印が使用されているが、別に「610-3-1」と付けられている地図もあり、これには1204印が使用されるということがある。これらの地図は「1-1」「2-1」と付けた(地図を整理した)段階は「海軍中央文庫」期であり、その後「海軍文庫」期になって収集したものを、「610」という第一レベルで同じ番号を付けた上で「3-1」などとしたと考えられ、時期を経ても同一地域の地図を収集したことがわかる。同じ地域の地図ではあるが、「修正」などが加えられていることから、新たな地図として、収集したものと考えられる。

また旧番号の中で、「丙24-1」など「丙」の文字が記載されて付けら

(表9-1) 海軍文庫地図整理表 (海軍文庫期)

年 代	海軍文庫名	番 号	番号印 (印番号)	参謀本部図書印 (旧番号)	海軍文庫印 (印番号)
明治22年 (1889)	海軍中央文庫	甲100~300番台	「中央文庫」陸図(1201)	「参謀本部海軍部図書之印」(1101)	「海軍図書之印」a(1103)
	↓	甲400~500番台	↓	「海軍参謀本部図書印」(1102)	↓
	↓	600~800番台	「中央文庫」和漢図(1202)		↓
	↓	600~1000番台	「中央文庫」(1203)		↓
明治26年 (1893)	海軍文庫	900~1700番台	「海軍文庫」和漢図(1204)		↓
	↓	1700~2300番台	↓		「海軍図書之印」b(1104)

* (印番号) は表7に対応する。 これらの地図は帝国大学附属図書館において以下のように内容毎に分類される。

(表9-2) 海軍文庫地図整理表 (東京帝国大学期)

番 号	内 容	点数	備 考
194590	二万分一迅速測図	201	
	二万分一仮製地形図	103	
	二万分一地形図	388	
194591	五万分一地形図	182	
194592	二十万分一輯成図	87	
194593	二十万分一帝国図	7	
194594	五万分一局地図	11	すべて「宇都宮近傍図」
194595	二十万分一一般図	1	「宇都宮近傍」
194598	「伊豆七島並小笠原群島之図」(大日本全図第四号附図)	1	地理局地誌課による地図

れた番号を持つ地図が二九点確認できる。この「丙」の番号を持つ地図はすべて1204印段階つまり海軍文庫時代のもので、そして地図からは、明治三〇年〜三四年製のものであることが確認できる。新しく作成された地図群を「丙」として受け入れたものも「海軍文庫」段階には多くあるといえるだろう。

また、「土浦近傍第二十号 牛久村」(0688)、明治十四年測量の二万分一迅速測図には、二枚の「海軍中央文庫図書」の「尋常借用票」が残されている。このような借用票も貴重な史料となろう。

以上のように、第二群は内容的には同じシリーズの地図をまとめてあり、これを順次、海軍文庫に連なる機関において補充してきたものである。印および地図に記載された番号をもとにして、地図の収集年代と内容を合わせ、地図収集や整理方法を段階的に把握することが可能であった。

3 帝国大学附属図書館の印と地図史料の収集・整理

次に帝国大学附属図書館で使用された印について見てみよう。再び第一群が検討の対象となる。前掲表3-1に掲載したように、「帝国大学附属図書館」の印文を有する地図は多く、以下のように形態が変化している。

まず「帝国大学」の名称を用いた印として「内務省引継地図」中で最も古い印は、明治二九年(一八九六)の「帝国大学図書之印」および「帝国大学図書館」の411印である。

その後、明治三〇年(一八九七)、「帝国大学」は「東京帝国大学」となるが、これ以降に捺された印についても、その形態に変化があり、印と共に、表紙などには「東京帝国大学附属図書館」と印字されたラベルが貼付されている。このラベルの番号と412印に(写真15)に記載された受け入れの日付と関係から、帝国大学附属図書館で使用した印の変遷を一覧で

示したものが表10である。

表10より、明治三二年段階で使用されたのは、413印(写真16)であることがわかる。その後明治三五年から明治三九年までは414印(写真17)が使用されている。両者は一見すると同じように見えるが写真に示した通り若干の相違がある。例えば「大」の文字において、線の長さが太の方が長く、全体的にも線が太いことがわかる。その後、明治四五年か



写真14
「中央文庫 陸図」
甲一八六一
(3.9×0.9cm)

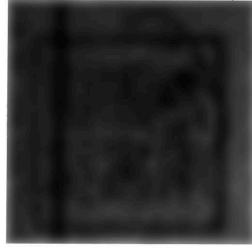


写真12
「海軍図書之印」(3.8×3.8cm)
「海軍文庫消印」(3.0×1.5cm)

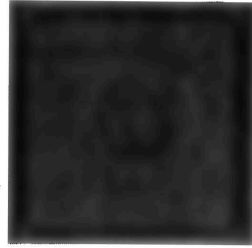


写真10
「参謀本部海軍部図書之印」
(4.0×4.0cm)
「消印」(1.4×1.0cm)

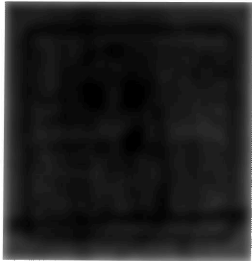


写真13
「海軍図書之印」
(3.3×3.3cm)

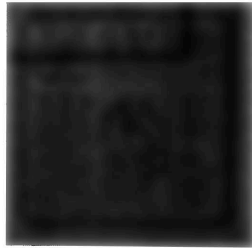


写真11
「海軍参謀本部図書印」
(3.9×3.9cm)

ら大正五年の時期に417印(写真18)・416印(写真19)がほぼ同時に使用され、大正一三年には417印と字体などが類似しているが417印より小さい418印が使用されている。また、3つの印と同時期において長方形の415印も併用されている。(但しこれは二点のみで、明治三九年と大正四年の日付が記載されている)。418印はラベルを有していないが、412印に「東京帝国大学附属図書館 大正十三年登記 文4209」の記載がある。

なお、第二群の海軍文庫収集地図においても415印・416印が使用されており、先述したように、第二群の地図はすべて大正三年五月一日の受け入れであることもこの印の使用時期を示すものとなろう。

以上、第三章では「内務省引継地図」における所蔵印および題箋などの手がかりをもとに、修史事業の過程あるいは海軍文庫での地図の収集・整理状況について報告した。同時に第一群の地図をもとに東京帝国大学附属図書館において使用された印が「内務省引継地図」のなかでどの時期において使用されたのかを検討したものである。

おわりに

以上、本稿は「内務省引継地図」と総称されてきた地図群についての内容と共に、地図史料の収集・整理について、明らかとなるいくつかの点を紹介したものである。特に、近代における地図収集・整理の問題については、印による伝来の検討に加え、各収集段階での把握のための手がかりがいくつも残されていたことを指摘したい。これらの手がかりは、地図収集・整理を理解するための目安となるが、今後より詳細な分析が必要であろう。史料編纂所には本稿で紹介した印やラベルを有する史料が多く所蔵されており、それらの史料の伝来とも関わって検討していくことも可能

(表10) 東京帝国大学附属図書館印の変遷

ラベル番号	年 月 日	印 番 号	請 求 番 号
No.048672 (帝国大学図書館)	明治29年10月13日 (帝国大学図書)	411	0355
No.063394・063398	明治32年9月28日	413	0329・332
No.088617・088618	明治35年5月17日	414	0364・0328
No.090262	明治35年7月24日	414	0346・0347
No.105984	明治37年7月20日	414	0344
No.108173	明治37年12月3日	414	0288
No.118845	明治39年6月8日	414・415	0349
No.163781	(記載なし)	416	0373・0374
No.171505	明治45年6月6日	416	0298
No.171523~171525	明治45年6月6日	417	0327・0326・0360
No.171526~171530	同上	416	0270・295
No.173498・173499	大正元年9月16日	416	0299・300
No.175899	大正元年12月7日	417	0362
No.176089	大正元年12月11日	416	0272
No.182620	大正2年6月23日	416	0282
No.182634	大正2年6月23日	417	0350
No.187252・187253・187268	大正2年11月28日	417	0291・0292・0361
No.190788	大正3年2月20日	416	0358
No.196871~196872	大正3年7月7日	417	0331・0363
No.197966	(記載なし)	415・416・417	0301~0309・0311・0365
	大正4年5月18日 (No.210835もあり)	416	0310
	大正4年5月18日 (No.210836もあり)	417	0366
No.201158	(記載なし)	416・417	0338・0343・0351・0353・035
	大正4年5月18日 (No.210837もあり)	416	0352
No.205377	大正4年2月22日	417	0229・0230
No.225541・225542	大正5年6月19日	417	0324・0336
No.231079・231091・231099	大正5年11月25日	416・417	0247・0325・0348
文7054・文7077	大正13年 (「登記」とあり)	418	0060・0075

であろう。

なお、本稿執筆にあたり、第二群の整理段階において、元国立国会図書館専門資料部特別資料課地図室特別資料課長鈴木純子氏より御教示を得ている。また、杉本史子氏には本稿に必要な視点の細部にわたり多くの御指導、御教示を得た。心より感謝の意を表したい。

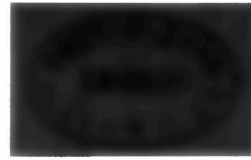


写真15
(4.2×2.7cm)

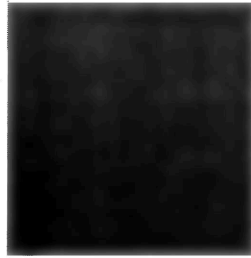


写真17
「東京帝国大学図書印」
(8.0×8.0cm)



写真19
「東京帝国大学図書印」
(直径3.5cm)

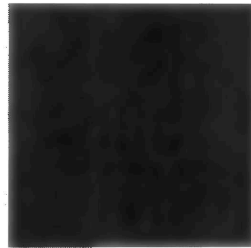


写真16
「東京帝国大学図書印」
(8.0×7.9cm)



写真18
「東京帝国大学図書印」
(8.1×8.1cm)

〔注〕

- (1) 三村清三郎・横尾勇之助編『蔵書印譜』(文行堂、一九一四年)、三村清三郎編『続蔵書印譜』(文行堂、一九三二年)、小野則秋『日本の蔵書印』(藝文社、一九五四年)、平野喜久代『蔵書印集成』(東京大学出版会製作、一九七四年)、朝倉治彦編『蔵書名印譜』(臨川書店、一九七七年)、国立国会図書館編『国立国会図書館蔵書印譜』(日本書誌学大系70、青裳堂書店、一九九五年)、『内閣文庫蔵書印譜』(内閣文庫、一九六九年)、渡辺守邦・島原泰雄編『蔵書印提要』(日本書誌学大系44、青裳堂書店、一九八五年)、丸山季夫・静嘉堂文庫蔵書印譜』(日本書誌学大系22、青裳堂書店、一九八二年)、林正章『近世名家蔵書印譜』(日本書誌学大系24、青裳堂書店、一九八二年)、中野三敏編『近代蔵書印譜』一〜四(日本書誌学大系41(1)〜(4)、青裳堂書店、一九八四年)、秋山高志編『水戸の蔵書印』(日本書誌学大系62、青裳堂書店、一九九〇年)、他。なお『国史大辞典』にも「蔵書印」の項に別刷として掲載されている。
- (2) なお、史料編纂所のホームページ上の「所蔵史料目録データベース」(以下「CAT版」)(<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/cgi-bin/todai/lanlogin.sh>)において「内務省引継地図」の検索が可能である。
- (3) 杉本史子「東京大学史料編纂所所蔵『内務省引継地図』とその公開について」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第6号、一九九九年七月)。なお、同図絵部分では特徴的な表現を持つ二つの鉱山関係図についても紹介されている。
- (4) 請求番号は第一群、第二群の通し番号となっている。本稿では具体的に示した地図の請求番号を四桁の数字で()に表示する。また、地図には枝番号を付けたものが多く、「①」「②」などの丸数字で示している。
- (5) これについては、飯田龍一・俵元昭『江戸図の歴史』別冊江戸図総覧(築地書館、一九八八年)に詳しく掲載されている。
- (6) なお、「内務省引継地図」の中には、江戸の地域の一部に含まれるものとし

て、「浅草図」も存在するが、研究史上の「江戸図」を取り上げたため、ここでは紹介していない。

- (7) 川瀬一馬『南歌文庫蔵書目録』(目録叢書第一編、日本書誌学会、一九三五年)
- (8) 一七九七〜一八五六。通称長崎屋新兵衛、後に久作と改める。江戸下谷長者町の薬種商であったが、国学者小山田与清(一七八三〜一八四七)の門に入った。
- (9) 前掲(5)。
- (10) 前掲(1)、『国立国会図書館蔵書印譜』。
- (11) 前掲(5)、『江戸図の歴史』二四〜二六頁。また、『東京市史稿』皇城篇附図第一(東京都編纂、一九一四年)にも、この地図が掲載されている。
- (12) 一八二九〜一八九六。幕末・明治時代前期の漢学者であり、東京府の地理志編纂の総修をつとめたり、帝国大学の史料編纂にも従事した。
- (13) 『帝国図書館書名目録』第三編。但し、『国立国会図書館蔵書印譜』ではこの細目について「正確ではない」としている。
- (14) そのいきさつについては、朝倉治彦「小宮山天香の蔵書処分」(『参考書誌研究』12号、一九七六年)。また、東京都立中央図書館蔵『尚存図書保存始末』にも天香所管の経緯が語られている。
- (15) 国立国会図書館蔵「小宮山叢書」(国小六七)。
- (16) 但し、掲載されている「江戸図」は焼失してしまっている。
- (17) 小山田与清は、徳川斉昭の召しに応じて彰考館に出仕したこともあった(『国史大辞典』)。
- (18) 『彰考館図書目録』(八潮書店、一九一八年初版、一九七七年増補)。
- (19) 秋山高志「立原翠軒旧蔵書について」(一)―国会図書館蔵「見聞書目」から―(『郷土文化』一九、一九八八年)。
- (20) 『見聞書目』は「立原任記」の印文を持つ正方形の朱印を有する。これは立原翠軒の子、杏所の蔵書印である。

(21) これらの書目は戦禍により、現在は十余点を確認するのみであり、「此君堂蔵本」の印影を持つものである(前掲、秋山氏論文)。なお、この『見聞書目』には彰考館への献納書目のほか、高山堂、崇文堂、玉枝軒、博文堂などの出版目録や生駒周蔵、近藤重蔵などの蔵書目録も記載されている。

(22) なお、翠軒の旧蔵書は、同志社大学附属図書館にも存在する。この蔵書のなかには、「此君堂蔵本」印のあるものと同時に、杏所の「立原任記」印のあるものほか、翠軒旧蔵とされるものがある。ほとんどが国書、江戸中後期の写本である。これらは明治二十四年に同志社に設けられた小室信介・沢辺正修文庫の中であった。その前の経路は不明であるという(秋山高志「立原翠軒旧蔵書について」(二)―同志社大学附属図書館本から―(『郷土文化』二〇、一九八九年)。

(23) 「落款印」とすべきものもあるが、これも「個人の印」に含めた。

(24) 前掲(1)。

(25) 屋代弘賢の「不忍文庫」。塙保己一門下の国学者、屋代弘賢の「不忍文庫」の蔵書印を有する地図もある。屋代弘賢が用いた蔵書印はこの「不忍文庫」の一種のみである(前掲(1)、『内閣文庫蔵書印譜』)。

屋代弘賢、号は輪池、幕府の奥右筆を永年勤め、官撰書の編修に関与し、特に『古今要覧稿』の主編者として有名である。また、当代随一の蔵書家で、蔵数万巻と称せられ、その目録に『不忍文庫改正書目』その他がある。この文庫名は居宅や書庫が江戸不忍池畔にあったのでこの文庫名がある。蔵書の每冊首右下部や表紙の左右下隅にもこの印を押している。蔵書内容はきわめて広範囲であった。弘賢の晩年、その蔵書を蜂須賀家へ献じ、この「不忍文庫」の木印も添えて送ったので戦前まで、蜂須賀家に残っていたという。蜂須賀家の「阿波国文庫」印と併せて押してある蔵書となっているものもある(前掲『内閣文庫蔵書印譜』)。なお、「不忍文庫」の蔵書印を有する地図は一点。「清涼殿之図」(58—①)。

- (26) なお、この「南畝文庫」の蔵書印は偽造されたものもあるから注意を要するとされているものである(川瀬一馬『南畝文庫蔵書目』(目録叢書第一編、日本書誌学会、一九三五年)。
- (27) 前掲(1)、『内閣文庫蔵書印譜』。
- (28) 例えば『国史大辞典』の「大田南畝」の項にも掲載されているほか、先述した蔵書印譜にもその他の蔵書印が掲載されている。
- (29) 『落款印大全』(武俠社、一九三一年)。
- (30) 川瀬一馬『南畝文庫蔵書目』(目録叢書第一編、日本書誌学会、一九三五年)。
- (31) 前掲(1)の『蔵書印提要』には「小宮山氏收藏図書」印が楓軒の項でも南梁の項でも記載している。
- (32) 特に水戸の蔵書印については、秋山高志氏によると、水戸の人士が蔵書印を貯え、蔵書印を作り、印章を鑑賞するようになるのは江戸中期、立原翠軒の周辺の人々からであるという。その理由として、水戸に出版、小売りを行う書肆が数件あったこと、そして篆刻に巧みな立原翠軒・立原杏所・林十江・鶴殿廣生・吉田愚谷・友部好正・石川清秋・野口北水らがいたこと、歴代の藩主に趣味があったことなどを挙げている(前掲(1)、秋山高志編『水戸の蔵書印』(日本書誌学大系62、青裳堂書店、一九九〇年)。
- (33) 『内閣文庫蔵書印譜』では明治一五年六月二十八日に内務省図書局で「図書局文庫」印使用開始とされている。
- (34) 前掲(3)。
- (35) なお、同様のものとして「館」の丸朱印および「新」の丸朱印もある。「館」は修史館のものと思われるが、「新」については不明である。
- (36) 測量・地図百年史編集委員会『測量・地図百年史』(建設省国土地理院、一九七〇年)。
- 鈴木純子『地図資料概説―国立国会図書館所蔵資料を中心に―』(国立国会図書館、一九九六年三月)。
- (37) 鈴木淳「教養学部所蔵特殊文庫の整理(平成六年度学部特別経費による)報告 海軍文庫の部」。
- (38) 海軍の制度の変遷については、日本近代史料研究会編『日本陸海軍の制度・組織・人事』(東京大学出版会、一九七一年)に詳しい。